
クラウドの受難

アマノン ジャック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラウドの受難

【Zコード】

Z4609M

【作者名】

アマノン ジャック

【あらすじ】

ディシディアのギャグ小説です。

「スモスの思い付きでアンケートをさせられた秩序組…その答えに腹を立てたコスモスはクラウドを脅すが…。

前書きにその話のキーワードとあらすじを入れたいと思います！拙い文でスミマセン。書きなれてないのでかなり汚

いです。

12／22本編終了しました。短編をちょくちょく公開したいと思います。

注意事項（前書き）

今更ですが…先に書いとくべきでしたね〇丁一

注意事項

今回は私の拙い文章を読んで頂き有難う御座います。

読んで貰つ前に…この話はギャグです。作者の思い付いた（酷い）ネタで構成されております。

そして結構重要ですが、キャラが崩壊しております。

特にコスモス…180。別人です。本編で厳しい彼女はきっと腹黒に違いないと思った結果…スイマセン間違えました。鬼畜でした。次にWOL…ブレまくりです。作者がブレた彼を見てみたいという結果がアレです。

あとはセシルとティナかな…

最後に「キャラがゲームのままじゃないと嫌」という方は引き返す事をオススメ致します。長くなりましたがどうぞ！

採用アンケート～コスモス編～（前書き）

元ネタは「コニコニ動画の履歴書です。

～キーワード～

- ・カウントダウン
- ・シドが可哀想

採用アンケート／コスモス編

「皆の者、今日和。え？私は誰かつて？『ティシティア影の主役にして…』

「ちょっとシド…時間無いんだから、せっかくしてくれない？」

コスモスがイライラしながらナレーター事シドを急かした。

「ああ、すまない。では始めるか…」

深呼吸して息を吸い込み、司会者口調で…

「FFFファンの皆さん、今日和！今日のゲストは秩序組のリーダーにして保護者のコスモスさんです。」

「ども！」

「それでは秩序組について聞いたのでボードを見てみましょう。」

ベールの被つたボードが一人の前に現れる。これはコスモスが事前に答えを書いている状態だ。

「ベール、オープン！」

シドの掛け声と共にコスモスの皆に対しての採用理由が露わになつた

「WOL：ブレ（デレ）ない

フリオ：私、だつて薔薇に囲まれたいわ

ネギ：最年少

セシル：パラディンはイケメン

バツツ：20歳の少年

ティナ：唯一の紅一点かつ美人だから

クラウド…ツンツン頭

スゴール…ライオン

ジタン：実は常識人

ティーダ：ムードメーカー

シャントット：何で採用したのか解らない…

「…。」

「おい、何か喋ろや司会者。」

「…いや、何と言つか結局の所は“顔”で採用してらっしゃいますね。」

「当然よ…美しいって良いわよね～ まさに女神の私にピッタリ！」

「あはは。だから秩序組の方々に引かれるんですね？納得！」

「…今、何て言つた？」

上機嫌だったコスモスがシドの発言に目を光らせた。

「うえ？ギャアアア！暴力反対。」

「ちょっと…聞いてないわよ…あの子達にアンケートを採つたなんて…！」

アンケートはコスモスが暴れた為に一時中断となつた。

「…では気を取り直して、今度は秩序組から見たコスモスについて

聞いてみました。」

「早く答えが見たいわね。」

「…お前が暴れなきやスマーズに進んでた…つわ、『冗談だつて…では、時間も無いので答えオープン…!!』

ベールを被つてないボードが出てきた

WOL・愛しの我が妻

フリオ…「」クリフ

ネギ・母が居たらこんな感じかな

セシル・ローザ（4ヒロイン）の方が美人

バツツ・そんな事より旅とか面白い事しようぜ

ティナ・あんな女性になりたい（遠い目）

クラウド・興味無いね～

スコール・壁と話してろ

ジタン・今度『』テートしよづせ

ティーダ・親父を秩序側に返せ

シャントット・腹黒女神

「何よ！アイシラ、ふつぞけんじやないわよ…」
（あんだけ自己中でうなんだから自業自得だわつ…）

「何か言つたシド？」

「いや、別に…（秩序組の奴らが）大変だな。」

□には出さなかつたが秩序組に同情するシド。そつとも知らす…

「でしょ？私はこんなに頑張つてゐるのに…特にクラウドめ、興味無い
いつじどりいう事よ！全く…ネギも普通、其処は“お姉さん”でし
ょ…！空氣読みみなさいよね。」

（お前がな。）

「シド、その鼻をへし折つて倒して蹴り上げるわ～よ。」

歌いながら告げるコスモス。

「じゅじゅのカウントダウン…死への秒読みじゃ…」

「あれ？シドとコスモスじゃん…何してんの？」

何も知らないオニオンナイトが一人に声を掛けてきた。オニオンナ
イトを見かけるやコスモスが歌いながら近付いていく。

「3つ数える間に天使に会える…」

「？」

「オニオンナイト、何をしてる…わざと逃げ…」

「3・2・1…」

またしてもコスモスが暴れた為に撮影は中止になつた。

「ふう、お前な…幾ら答えがアレだからつてな落ち着けよ…」

「だつて、私はあの子のオカンじゃないもの。」

オニオンナイトを殴り終えたコスモスの衣装は血で赤黒く染まつて
いた。

「なあ、仮にも女神なんだから着替えて來い。」

「はあ？“仮”って何よ？失礼ね！もう時間無いから良いわ…それ
にどうせコレ筆談でしょ？姿が写る訳じゃないし。」

「（駄目だ…この女神。）では、気を取り直して…今度は敵の混沌組の方々にも採つたので答えをど～ぞ！」

「また…私、聞いてないんだけど…」

「コスモスの意見を無視してボードがオープン

ガーランド：初恋の人にそつくり

皇帝：我が人生の出汁

暗闇の雲：あ～ いう格好つて動きにくくない？

ゴルベーザ：幸薄そうでほつとけない

エクスデス：“無”関心

ケフカ：ティナを奪われた

セフィロス：興味無いからそれよりクラウドに会わせ～

アルティミシア：もつと露出して良いんじゃない？

クジヤ：哀れな女神

ジェクト：ティーダは元気か？

ジャッジ：返り討ちにされた（ シャントット）

「ああ、腹立つ…」「いや…好き勝手に言こやがつて…へそ、ボード貸しなさい。」

「…。コスモスさんが忙しそうなので一日休憩です。」

三度目の中断。

「コスモスが答を書いたみたいなんで…もうボード出して。」

ボードが出てきた

ガード…よく見るとお茶田さん

うほあー…てめえの出汁なんざ誰がなるかボケが痴女…まず服装整えろよ…コレだから中途半端は

ゴル兄…紳士

先生…うちの子達によく虐められてる人

ピエロ…化粧剥いでやんよー！

いか…ストーカーは犯罪

魔女…引きこもりは引っ込んでろ

ぬこ…周りをよく見て『ごらんなさいな？

親父…ティナとトレードしてゴメンね

負け犬…あんな破壊人に立ち向かうとは命知らずw

「お前、コレ…混沌組の奴らがあだ名になつてるじゃないか…書き直せーー！」

「嫌よ、知らないわよー…もう腹立つから帰るーー！」「スモスはシドから去つていた。

「えー、ゲストが帰つてしまつたので番組を終わらせて頂きます。
次回はカオスさんです！では、またーー！」

番組が終了し…

「ふう…あの女神め。」

「貴様か…「スモスを泣かせたのは？」

WOLFがシドの前に現れた。

「はあ？」

「仲間を侮辱した罪は重い……散れ！」

「ギャアアアア！」

攻撃をし始めたミローニにシドは無我夢中で逃げていた。

採用アンケート／コスモス編／（後書き）

今更ですが、載せました。ついで私は何故初めに載せなかつたんだ
る…

受難は此処から（前書き）

ギャグ、キャラ崩壊注意。

～キーワード～

- ・興味無い
- ・写真

災難は此処から

「興味無いつて……ストーカーに追われて匿つてるのは誰だ～？」

「コスモスがクラウドに向かつて問ひ。思ひ付きて考へたアンケートで自分に對しての意見に立腹のようだ。」

「アンタに頼んでない。」

クラウドは興味無をうそうに答える。すると……

「ふ～ん……そんな事言つんだ……」

意味ありげに笑ひ「コスモス。

「じゅあコレなんだ？」

「コスモスの手にはクラウドが女装した時の写真があった。

「…? どひ…何処でそれを?」

「えつと銀髪の髪長い刀の人…大事そつに持つてたから貰つちやつた（ 強奪 ）」

「あの野郎…俺の唯一の汚点を…しかも寄りによつて渡つちゃいけない奴に持つてかれてるし…」

「どういう意味よ? あ、そつだ…バツツがアンケートに面白い事を探してたから見せてみたらビンな反応するかしりつぶふ…楽しみ

「コスモスはクラウドから凄い勢いで離れていた。」

「

「頼むから俺の生き恥をまき散らさないでくれ！」

その後…クラウドはコスモスの後を追い、『機嫌を何とか取り写真はバツツに見せられずに済んだが、コスモスで会う時でのみ女装をさせられてしまいクラウドの受難は続くのであった…

目撃者（前書き）

クラウドがコスモスと二人で会ってる所を偶然目撃した人物が…

～キーワード～

- ・目利き？
- ・腹黒女神

「なあ、コスモス…あの…」

「どうしたの？ジタン？何か用？」

ジタンがコスモスに気になる事を聞いた。

「あの…たまに来る娘居るじゃん？誰？」

「…知りたい？知りたい？」

コスモスはこりや面白くなつてきたと言わんばかりにジタンに聞いた。

「うん。すげえ可愛い。綺麗な金髪と紫のシルクのドレス…ちよつとガタイが良いけど健康的で素敵だと思ひ。」

嬉しそうに話すジタンに別の意味で嬉しそうなコスモスはジタンの目撃を関心した。

「よく見てるわね」

「俺、一応盜賊だから田利きなら任せてくれよ…あの娘誰？」

少し、考え込むコスモス。

(やついえば、名前考えてなかつたな…それに)

顔を上げジタンを見て、

(今教えるのも楽しいけど、もつ少し後の方がもっと楽しそうね?)

心の中で黒い笑みを浮かべながらジタンに適当な言い訳をする。

「う～ん、彼女ともシャイだから話してる私にも名前教えてくれないの。」

「へえ～。確かに遠目で見ても恥ずかしそうにしてたな…何かますます興味湧いたぜ！なあ次会う時に紹介してくれよ？」

「私はむしろ紹介したいんだけどね？もう、本当に。今すぐに。でも一応また会つた時に聞いてみるわね？」

「あ～、宜しくな！」

こうして雲の受難は本人の知らない内にどんどん広がっていくのであつた。

それぞれの反応（前書き）

クラウドはコスモスに呼ばれ例の如く女装して彼女の元を訪れた。
～キーワード～

仲間1～6はプライバシーの為に名前を伏せさせて頂きます。

それぞれの反応

「今日呼び出したのはジタンが“貴女”に会いたいんですって?会えぱ~?」

軽く言うコスモスにキレるクラウド。

「良い訳ねえだろ!つ~か何でそんな適当なんだよ!~!」

「え~?“男”らしく、堂々と会えば良いじゃない?大体…他の仲間達には好評だったわよ?」

「男らしくって…ん?」

一回戻切り…コスモスを問い合わせる。

「ちょっと待て!他の奴らも何故知ってる?」

「あら?何でだつたかしら?」

コスモスは思い出し(笑い)ながら他の仲間達の反応を話した。

一回想一

仲間1:「…ゴクリ!」

仲間2:「え?誰なんすか?このガタイの良い娘!可愛いっすね~!~!」

仲間3:「見た事無い娘だな…もしやカオスの手先ではあるまいな?もしさうであれば私が全力で斬る!」

一回想は終了し、クラウドは呆然とコスモスを見る。

「だつて？ほら好評でしょ？」

クラウドの女装写真を手でヒラヒラさせながら答えるコスモス。

「アホか！アンタ！－何、俺の写真を他の奴に見せてんだよ？正氣か？つゝか内1人間違いなく敵意じやね～か！－！」

「大丈夫！私から彼にはちゃんと私の味方つて伝えたから－－あ、今思い出したんだけど…他の仲間達も見せたんだつた…」
「…としながら平然とバラすコスモス。

「え？まだ見せてんの？」

戸惑うクラウドを無視して再び話す。

－回想再び－

仲間4：「……。」（絶句しつつ心の中で不憫だと思つてゐ。）

仲間5：「つわあ…美人さんですね？」（取り敢えず誉めつつ、不憫だと思つてゐ。）

仲間6：「…可哀想に。」（ガキなので正直に答えた。）

回想が終了し満面の（邪悪な）笑みをしたコスモスが…

「ね？」

「ね？…じゃね～だろー」「イツら明らかに俺だつて気付いてんじやね～か！－」

「スコールは絶句するほど美人つて思ったのよ…きっと…セシルだつて誉めてるじゃない？ネギのは多分照れ隠しよ！－」

「絶対違うと思つし…兎に角この格好でジタンには会わないからな！」

すると、その言葉を待っていたかのようになコスモスは最悪な提案を告げた。

「まあ、そう言つとと思って代わりの人を連れて來たわよ？」
「何だと？」

果たしてコスモスの連れてきた人物とは？

次回に続く。

番外編・じばむひり（前書き）

ちょっと番外編。

～キーワード～

- ・小学生並みの兄弟喧嘩
- ・怒つて当然な弟

番外編・じばひり

「クラウドも似合つてゐし、貴方もしてみ「」
「丁重にお断りします。」

凄く困つた顔でやんわりと丁寧に断るセシル。

「ちよつ… イントロクイズじやないし… 最後まで話を聞きなさつよ
！貴方なら絶対似合つと思つんだけど…」

コスマスはセシルの白騎士姿を見ながら褒める。

「それ嬉しくないんですけど… 僕、用事があるんで、もう行つて良
いですか？」

早くこの場を去つた方が良さそうだと思つたセシルはこれ以上コス
モスに付き合いたくないので去ろうとした。

が…

「用事つて… “コレ” の事じゃないわよね？」

コスマスの後ろにいつの間にか「ゴルベーザが居た。

「兄さん？ あれなんで此処にいるの？」
「実はな… セシルよ、コスマスから聞いたのだがお前… 女装をする
らしいな？」

全く身に覚えの無い事を「ゴルベーザに言わせセシルは戸惑つた。

「言ひてないよ。」「スモス、兄さんに何を吹き込んでんの？」
「貴方のお兄さんがどうしても“可愛い妹”を見てみたいって言ひつから…つこ」

「へつ…と悪びれも無く言うコスモス。

「何…妹って？僕は弟ですよ？頭、大丈夫ですか？」
「セシル…我が妹よ」

その一言でセシルの堪忍袋の緒が切れた。

「お前は暫く黙つてろ。何が妹か！このバカ兄貴…！」

セシルの言葉に、ゴルベーザは静かに怒る。

「…何だと？貴様、兄に向かつて何で口を利いてるんだ！」
「弟の性別を間違つてる時点で兄じゃね～よ！」
「仕方無いぢやないか…私だって本当は妹が欲しかったんだから…大体その顔が悪いんだぞ？中性的で。」
「悪かつたな！中性的で…！」てめえなんか鎧で顔すら見えてねえだろ？本当に僕の兄さんですか？エクステスとかガーランドぢやないよね？…僕の兄さんは優しいんだ！お前なんか僕の兄さんぢゃない…！」

一気に撒くし立てられゴルベーザは更に怒る。

「…実の兄を否定するとは…反抗期だからって言ひて良い事と悪い事があるだろ？もう良い…失望したぞ、セシル。お前とは縁を切る。…さらばだ」

「 もう一度と来るな…」

こうして兄はカオス側につき弟はコスモス側につき兄弟喧嘩は収まつたとか收まらないとか…

「あれ？私のせい？まあ良いか 喧嘩するほど仲が良いって言うしね？」

コスモスは取り敢えず自分のせいでは無いと思つてゐる。

クラクラにしてやんよ（前書き）

前回、コスモスによって女装の写真が見られたクラウド。そんな中、足音が近付いてきた…

～キーワード～

- ・素地
- ・アルプス
- ・傷が増えました

クラクラにしてやんよ

「あら？ 来たみたいね？」 「何？（バツツかティナかどっちだ？ 出来ればティナが良い… アイツなら気付いても話さなさそうだ… 頼む！ 神様！）」

田を瞑つて両手を合わせ祈るクラウド…

「“神”様なら田の前に居るじゃない？」「黙れ！ 邪神め！… つ！ お前は？」

コスモスとクラウドの前に居たのは…

ティナだった。

「コスモス… 用事つて何？ 新しい娘が入るつて聞いたけど…」

キヨロキヨロと辺りを見回すティナ。

「本物の神様、有難う。」（小さい声で）

「聞こえてるわよ？ そこ… それより来てくれて有難うティナ。紹介するわね。クラウドがストーカーに襲われて廃人になつたからクビにして新しくこの娘を入れたの。」

「廃人つて… 明らかに過去を暴露してんな。オイ！」

「？」

ティナがクラウドを見ながらキヨトンとしている。気付いたクラウドは慌てて“女”らしくする。

「あつ！…おほん！…そんな事より名前は「スモスから」ってよ。私、恥ずかしくて口が回らない。」

正体はバレてなさうなので役に徹してみるクラウド…

「やうね~。『クララ』なんてどうかしら？」

「…クララって！アルプスの少女ハイジか！…まさかお前、ハイジ＝廃人と掛けてその名前を選んだじゃ？」

「ま・さ・か！そんな事無いわよ。素敵な名前ねクララ…ふふふ。」

クラウドもといクララを見て噴き出す「スモス。

「アンタ、今笑つたろ？さては掛けてたな！」

「まあまあ。そんな事より言葉遣いを直さないとね~クララちゃん？」

「はつ…」

ティナを見たが無表情で何を考えてるか分からぬ。

「……。」

黙つてクラウドを見るティナ。

「あら…『メンナサイ。私つたら…』スモスの前ではつこ“素”が
出ちやうの。」

「“地”の間違いでしょ？」

「黙らつしゃい！…あらヤダ。まだわ…『メンナサイ。初めまして、クララと言こます！宜しくね。ティナさん。』」

そう言つて手を差し伸べたクラウドだが…

「……な……で。」

「？…ティナさん？」

差し伸ばした手を弾き拒絶される。

「来ないで！…クラウド、貴方…私がコスモスサイドで女一人だからって気使つてくれるのは嬉しいけど…間違つてるわよ。」

沈黙。

「…いつから気付いてた？」

「初めからよ。でもどうして女装する必要があるの？…クラウドはそのままでもいいじゃない！」

「…いや、これには訳があつ…」

「もう良い…クラウドなんて大ッキライ…！」

「え？…ちょっと…！」

ティナはクラウドとコスモスから離れていた。誤解が出来てしまいクラウドの心に新たな傷が生まれてしまった。

俺、参上。（前書き）

ティナにあらぬ誤解を掛けてしまったクラウド…誤解は解けるのだろうつか？

～キーワード～

- ・女優クララ
- ・コスマスの珍しいツツコミ
- ・人の話を聞かないWOL

「……。」「……。」

ティナが去った方向を見ながら沈黙する一人。

「…何か、言いたそうだな。話せよ。」

沈黙に耐えれなかつたのかクラウドが口を開く。すると…

「…じゃあ、遠慮無く。泣かしたく、泣かしたく。WOLが来るぞ
。」

「え？」

その瞬間、クラウドは凄い殺意を感じた。あの男…WOLが斬りか
かってきたのだ。

「お前は仲間を侮辱した。…斬る。」

「ちょっと待て！誤解だ。訳を話そうとしたらあつちが行つてしま
つたんだ！！こつちだけってコスモスに言われてやつたんだ！！！」

斬りかけてた剣を引っ込めるWOL。

「…なるほど。そういう事か…」

「解つてくれたか。良かつ」YOL

クラウドが安堵した束の間、WOLがまた斬りかかってきた。

「…貴様が、コスモスを盾に言い訳する酷い娘という事はよく解つた。カオスの手先め！私が斬つてくれよう…！」

「何で、そなるんだ！おい、コスモス。コイツに俺の写真を見せた時何て説明した？」

WOLの剣を交わしながらクラウドはコスモスに聞いた。

「今は私側だけ、いつあつちに寝返るか解らなーって言った。」

あつけらかんと答えるコスモス。

「お前～！だからコイツ俺に敵意を持つてたのか…！…もつ一つ聞いて良いか？ティナには何て説明した？」

少し考えて、

「う～んと。ティナが女の子欲しこりって言つから…敵はオバサンしか居ないでしょ？同年代って言つと居ないし可哀想だから“女装癖”のある貴方を選んだの！」

“女装歴”はあるが、“女装癖”は無い。あと可哀想なのは寧ろ俺だ。…で、アンタはティナに女の子を紹介するつて言つた訳だ。あのな～、俺の体格見たら解るだろ？女じやないつて。どうしてそういう誤解を作るかな？」

「喜ばせようと思つて…」

「誰を？」

何となく答えは予想は着いてるが聞いてみるクラウド。

「私を」

「ヤツパリか！アンタは…つてそれよりこの剣バカ（WOL）を

止めてくれないか？

「WO」の一方的な攻撃を避けながらクラウドがコスモスに願う。

「え？無理。ソルジャーなんでしょう？自分で止めなさいな？」

「…アンタ、もう少し自分が何してくれてんのか考えてくれ。つか女装してる時点で持つてねえよ…剣。」

「…」

「…」

「演技は形からだ。女が刀を持ったら物騒だろ？」

「アンタは女優か！」

「WO」の攻撃を交わしつつコスモスと余裕で話す雲であった。

ルートのアドレス（前書き）

WOLの一方的な攻撃を華麗にかわしてたクラウド…だが履きなれないスカートのせいか動きが段々遅くなり…遂に追い詰められてしまい…

～キーワード～

- ・黒クラウド
- ・青鬼

「ちがいしょー。これまでか……」

ビリビリに破れた衣装、着なれない服装のせいで動けなくなつてしまつたクラウド。

「やつと観念したか。カオスの手先め。」

「ぐう！（もう駄目だ…俺この格好で死ぬのか？うわ…ヤダな。嗚呼…）このドレス高かったのにな…万ギルして買ってローンもあるのにな…髪もあのヘアスタイルに合うのをやつと見つけたのに…下着だつてオーダーメイドなんだぞ…ん？あれ？何だろ…段々腹立つてきたな…）」「

黒いオーラがクラウドを包み込む。

「最後に言い残す事があれば聞いてやろう。私も鬼じゃない。さあ、言つがい「？」

WOLの頬に一筋の傷が出来る。

?

「てめえ絶対殺す！」

クラウドはスカートからナイフを出しWOLの頬を斬りつけたのだ。

「形からは何処行つた！」

「うるせえ！俺はコイツのせいでお金がパーなんだよーーー！……ドレス

を破りやがつて…」

ドレスのスカートを持ちW.O.」に言ひ。

「お前が動くからだろ。私のせいにするな！小刀を隠し持つていては…往生際の悪い奴め。」

「お前のせいだろ？何が鬼じゃないだ！人の話を口クに聞かずに斬りかかった癖に！！お前はいつもそうだ。自分がリーダーだからって他人の意見を真つ二つにして自分がコスモスを優先して…俺らがどれだけ苦労してると思つてんだ！！！衣装が青いだけに血が通つてないんじゃねえのか？この青鬼！！！！！」

青鬼と言われW.O.」が怒る。

「…貴様、仲間やコスモスだけでなく…この私をも侮辱する気か！」

「侮辱？事実だろ。ああ…忘れてた…角も生えてたっけ？益々、青鬼だな？…ククク。」

兜の角を指差し嘲笑うクラウド。

「生えてない！これは兜だ…！見て解るだろ？全く女ともあらう者が無礼な言葉を吐きおつて…」

“女”と言われ更に笑い出すクラウド。

「女？俺が？アンタ、本当に血が通つてないんじゃないのか？頭に…」

「どういう意味だ…もつ許せん。絶対殺す。」

「売られた喧嘩は買つてやるよ…かかるてきな…！」

救世主（前書き）

前回、一度は立て直したバトル。だがやはり履きなれないスカートのせいで、またも窮地に陥ったクラウド。そんな彼に救いの足音が…

→キーワード→

- ・猿
- ・遂にWOLが…

「私を侮辱した罪は重い。潔く死ね。」

余程頭に来たのだろう「W.O.」はすぐにでも斬りかかるうとしていた。

「ちつ！この格好じゃなかつたらブレイクしてEXモードでシバけたのに……！」

「問題無用！斬る。」

剣がクラウドの頭に着ひとつとした時、救いの足音が…

「W.O.、お前女の子に手を出すなんて見損なつたぜ！」

「ジタン！何故此処に？」

「コスマスに呼ばれたからだよ。今日は……その……兎に角だ…女の子を傷つけた罪は重いぜ？」

ジタンがクラウドを庇つようとする。

「女であれば、カオスの手先も庇うのか？お前の範囲はバリ広だな。」

「女でも斬るようなお前に言われたかねえよ。女性に優しく…これが紳士の捷」

「ふん！女なら誰でも尻尾振る猿が！…だからお前は甘いのだ…！」

「俺が甘ちゃんなら、敵に非情のアンタは青鬼だな。」

「一度目の屈辱。W.O.は怒りに震えていた。

「へへへ……一度も私を侮辱しあつて……貴様ら絶対斬る……ん？あの娘は何処行つた？」

れつぎまで居たクラウドが二つの間にか居なくなつてゐた。

「さあね？おつかない青鬼に襲はれて逃げちやつたんぢやない？」

「……三度目だ。いや、四回言われた。そのセツフ……まあ良い、貴様の鳴の根を止めてやる！」

剣をジタンの方に構へ直し、エオルが襲つてくる。

「ああ……頭に完全に血上つてんな……まあ、適当にやつ合つて俺もとこずりこよ。」

ジタンの助けによつて何とか逃げたクラウド。彼はいつたい何処へ向かつたのか？

「あんたがへへ、上手く逃げやがつて。」

クラウドの半際の良やく毒づく口スモスであった。

クラウドをたずねてII千里（前書き）

クラウドを探してゐるコスモス。そりそり…

～キーワード～

- ・ティナが可愛いのは此処まで
- ・性格がハンパなく悪いコスモス

クラウドをたずねて三千里

「ねえ。コスマス…クラウドは？」

コスマスがクラウドを探してるとティナに出会った。

「あら、ティナ。クラウドなら私も探してるんだけど…全く何処行つたのかしら！」

「…そう。あのね、コスマス…私わっしの事謝りうと思つて…」

「謝るつて？どうして？」

わっしどは違ひ落ち着いてるティナ。

「私ね…一人になつて考えたの。クラウドはクラウドなりに私の事を励まそつとしたんだつて…そう思つと私、悪い事したなつて…」「そんな事無いわよ。誰だつてあんなガタイの良い男が女装したら怯えるわよ。貴女のせいじゃないわ。」

コスマスが優しくティナに言つ。元々、コスマスのせいなのだが…

「もしかすると、私を楽しませようとしたのかもしれない。…うん。ゴメン。聞いてくれて有難う。私探してみるね！」

「ああ、ちょっと…」

ティナはコスマスの元を去つていた。

「もう！まだ誤解したままなら楽しかったのに…つまんねえ…！」

クラウド本人が居ない間にティナの機嫌は直つたが新たな誤解を生んでしまつたようだ。

クラウドをたずねて二千里（後書き）

次回から過去編に入ります。

過去編・秩序組の受難◀前編▶（前書き）

話は過去に戻り、コレはティナとジエクトをトレードする前の話。

ネタバレを書くと昔、ティナはカオス側でジエクトはコスモス側
だったそうです。（皇帝談）

～キーワード～

- ・異性に弱い秩序組
- ・究極の一択

「カスオ達は意外に強いですね。コスモス、このままでは我が軍は負けてしまいますわ。何か良い手はありますんの？」

シャントットが苛立ちながら話す。秩序組は負けてばかりなので腹が立つてしまうのだ。

「そうね。あつちは女3人だものね。やっぱり手を抜いてしまうのかもしないわね。…あ、そうだ！」

「…何か閃きましたの？」

コスモスはシャントットに耳打ちした。

「それは良い考えですね。楽しみですわ…おつほつほつほ…」

シャントットの高笑いが周りに響いた。

一数日後

「さて、皆さんに今日は大事なお話があります。」

コスモスにしては珍しく真剣な口調だった。

「何ですか？話つて？」

ティーダが落ち着かない様子で聞いた。

「おい！ティーダ、落ち着け。今から話す所だろ？」

隣に居たフリオーナー、ルガティードを制する。静かになつた所でシャントットが口を開いた。

「おほん！宜しいかしら？…我が軍は窮地に立たされておりますわね？そこで私とコスモスは話合いましたの。」

「…で、秘策は？あんたが？」

ジエクトがやや面倒をうご言つた。

「ええ！では心してお聞きなさいませ。わあコスモス。」

「私たちは敵の色仕掛けに弱い…だったらそれに対抗すれば我が軍の勝利は確定です。」

その意見にバツツが…

「おいおい。確定つて自信たっぷりだな。」

「ええ。だつて貴方達は今から女になるんですもの。」

「……。」

暫くの沈黙。

「…はつ？」

オニオンナイトが思わず疑問を口にしてしまつた。

「だから、貴方達は眞の女の子になるのです。」（……何？コレ？
罰ゲーム？）

…とは、男衆全員の疑問。口には出さないが皆思つてしまつ。

「ああああー衣装は用意してありますわーーれつやとお着替えあそばせーーー。」

「一せニニセニニセニニセニ」

男衆全員否定。ジタンが皆を代表して抗議する。

「おかしいだろ？ 何で色仕掛けに対抗するのに女装なんだよ！」
「真つ先に引つかかる方に言われたくありませんわ。良いですか？
貴方達が頼りないせいで私達はどれだけ負けてると思つてますの？」「だからってそれは無いだろ。いくら何でも……。」「だからってそれは無いだろ。いくら何でも……。」

バツツもジタンの抗議に参加した。

「ええい！お黙り！！もう面倒臭いですわね…」

するが、シャントットが抗議に腹を立て悪魔のよくな一択を男衆に提案（とにかく強制）しだした。

「では、いらっしゃよ。私の実験体になるか女装するか…どちらが宜しくて？」

— 女装で良いです。（何この究極の選択！）

哀れ男衆。どちらを選択しても彼らには地獄だった。

「宜しい！では「コスモス」我が軍のチーム名を発表しなさい。」

（チーム名つて…何だ？）

“チーム名”といつ言葉にやわめく男衆。

「はい。では我が軍が12名なので、女子十二樂坊で！」

「楽器は？」

男衆「スモスに質問。しかし答えたのはスモスではなく悪魔の笑みを浮かべたシャントット。

「何を仰りますの？お持ちでしょ？立派な武器…」
「ええええ～！」

男衆の悲鳴がござました。

いつして、女子十一楽坊はカオスに対抗するのであった。

中編へ続く。

↙中編 ↘（前書き）

戦に負けてばかりのコスモス側。 今回は女装で勝負するところ無茶振りを言い始めた。 果たしてこの戦い… 君と戦うか凶と戦うか…

今回バトルが3つあった様やや長いです。

～キーワード～

- ・仲間割れ
- ・魔女のとある疑惑

カオスの居る地に足を踏み入れたコスモス軍。

「ふん！来たな…哀れな人の子どもが…」

カオスがコスモス軍に気付き鼻で笑う。

「どうせ死ぬだけだよ？もう大人しく壊されちゃいなよ？」

カオスに続きケフカが笑いながら言つ。エクスデスもケフカに習い…

「そつだ。無に帰してやろ。ファファファ…ファ？」

カオス軍がコスモス軍の面々を見て凍り付いた。

「うふふ…。どう？生まれ変わった我が軍の姿は？美しそぎて言葉も出ないかしら？」

コスマスがカオス軍に向かつて言い放つ。

「おつほつほつほ！我が軍、女子十二樂坊が貴方達を成敗してあげますわ。覚悟なさいませ！！」

シャントットがカオス軍を指差しながら言つ。

「…古つ！パクリだし…樂器は武器かよ！…物騒な十二樂坊だな。」

カオスがツツ「ハハ」と感想を漏らす。

「ツツコリヤーかよ……貴様ら何てはしたない格好を……見損なつたぞ。」

ガーランドが上司にツツコリヤーもコスモス軍の変わり果てた姿を見て憤慨する。戦闘好きな彼にとって女装は許せなかつたらしい。

「ならば、お前は選べるか？ 実験体になるのと我々と戦うのと……」

ガーランドの宿敵であるWOLが泣きながら訴えた。

「……うん。『メン。おじちゃんが悪かった……泣くな。解つたから！ 戦つからー！』

「ガーランド。貴様、こんな不得体の知れない奴らに何故戦いを申し込む？」

皇帝がコスモス軍を信じられない形相で見ながら同僚であるガーランドに抗議する。

「察してやれよ。メデューサが一頭の蛇に全知能持つてかれてるんじゃないか？」

「そうですよ。戦いにも礼儀があるのでですよ？」

アルティミシアもガーランド同様コスモス軍に同情する。

「アルティ……お前まで！ つかガーランド……何気に悪口言つたな。身内だろ？」

皇帝が必死に訴える。だが、ガーランドは皇帝の訴えを鼻で笑い……

「フン！ 身内って……どくせ裏切る癖に……カオス＝私をも支配するん

だろ？ だつたら今すぐしてみろ。 ロスモス側に倒される前座め。」

ガーランドの言葉に皇帝がキレた。

「…この野郎。 よしーお前ら（ロスモス軍）待つてろー！ ハンデを与えてやる。 今からこのバトル^{ガーランド}馬鹿を消すからじつとしてろー！…」
「口だけでトラップ攻撃にしか芸の無い奴がー良かろう。 かかって来い。」

こうしてガーランド vs 皇帝のバトルが始まった。

一方…

「待つてろつて… 言われても時間掛かるし… 時間圧縮して二人とも亡くなつた事にしましょつか？」

アルティミシアが退屈そうに言ひや。

「お前、 時間圧縮の使い方間違つていなか？」

暗闇の雲がアルティミシアに對して抗議する。

「時間は有意義に使わないと損です。 それに待たせてる彼らの決意が無駄になりませんか？」

「有意義つて… お前にとつてあの一人は無駄な時間なのか？ 酷いのう…」

暗闇の雲がアルティミシアを残念そうに見た。 先程からやたらと抗議する同僚に遂にキレる。

「… 煩いわね、 さつきから。 アンタだつて全て無に帰したいんでし

よ？じゃあ別に良いじゃない。コレだから中途半端は…」

「何じゃと？中途半端とはどういう事じゃ？言つてみよ？」

「アンタ、女でも無ければ男でも無いんでしょ？だから中途半端つて言つてんの！エクステスみたいに性別くらいハツキリしたりビリなの？この無性物！！」

“無性物”と言われた暗闇の雲がキレる。

「ファファファ…お前こそ、中途半端に色気付きおつて。もつと動きやすくしてはどうだ？そんな格好だからトロコのじゃよ。…あとパンツ履け。」

アルティミシアはパンツを履かない主義らしく、それを田の前の相手に田撃されたのに憤慨する。

「何ですって？…パンツの事は誰にも言つてないのに…貴様、いつ覗いた？嗚呼…同性のティナなら兎も角、寄りによつて…この無性物に見られるとは…」

「黙れ。ノーパン魔女。…決めた。お前から無に帰してやるわ！」

「ならば私は貴様の時を止めてあげるわ！」

今度はアルティミシア vs 暗闇の雲のバトルが始まりだした。

一方…

「うわあ…くだらない事で争つてるよ。あの入達…あれ？ガプラス何処行くの？」

クジヤがガーランドやアルティミシア達のバトルを呆れながら見るとガプラスが何処かに向かって歩き始めたので話し掛ける。

「…もう嫌だ。お家（ 1-2 の世界）に帰る一カオスの我が儘に付き合つのはウンザリだ…！」

「ふうん…あつそーじゃあね…！達者で。」

手を振つて見送るクジャヤ。そこに…

「お前、止めろよ。何故引き止めない？」

エクスデスがクジャヤの態度に文句を言う。

「だつて…本当にぐだらないし…本人が嫌がつてゐたら止めなくて良いじやん。」

「コスマス軍に對して人数で負けてるから…全く、自分以外に配慮が無いから我々の事を考えれないんだな。」

「僕はいつだつて自分が一番さ。今に始まつた事じやないだろ？」

自信満々なクジャヤ。その態度に益々苛立つたエクスデスが…

「そんなんだから弟に負けるんだよ。もっと視野を広げろよナルシ～？」

ピキッ！クジャヤの額に血管が走る。

「…僕がいつジタンに負けた？アンタだつてよくコスマス軍から技の練習台にされてんじやないか！少なくともアンタよりは強いよ！…！」

事実、エクスデスはコスマス軍によくレベル上げの練習台にされる。コスマス軍からは“先生”と呼ばれてるのは内緒。

「ほほうーー言つたな… 小僧！！ 貴様から無に帰してやるーー！」

「ちょつー暗闇の雲とセリフ被つてるよ？ もう枯れ際だから浮かばなかつたのかな？ セリフ…」

「……！」

「あはははーバカ、バカーー！」

遂にはクジャクエクステスのバトルも発展し始めた。

こうして、力オス軍は身内揉めが始まりコスモス軍は取り敢えず面白いので見る事にした。

後編へ続く。

魔女の疑惑については作者自身は見てないのでネタにはしたけど確かめてないです。

仮に確かめたとしたら俺、変質者だよ…

カオス軍に対抗しにやつて来た女子十一楽坊。しかしカオス軍は十一楽坊に恐れをなしたのか同士討ちをし始めた…果たして軍配は?

（キーワード）

- ・女子高生
- ・ティナが辞めた理由
- ・ジョクトが悲惨

「うつざいですね……ストーカー。いくら金髪の人が気になるからつて後追うの止めたらどうです?」

ケフカがセフィロスを茶化す。

「お前だつてティナの後を追つてたから同類だろ?一緒に破壊しましょうつて……一人で何も出来んのか!この馬鹿殿!……」

ケフカの格好が馬鹿殿というか8のオダイン博士に似てるのか意味の分からぬ事を言い出すセフィロス。

「貴方こそこの時にコピーに行動してもらわないと何も出来なかつたでしょ?に?元英雄も人の手を使わないと只の人形ですね?」
「……情緒不安定のお前に言われたく無いわ!……くそ、斬る。行くぞ!……」

いつの間にかケフカ vs セフィロスのバトルまで始まり出し、カオスは溜め息を吐いた。

「ああ……我自ら動かねばならぬのかつて……セニ……寛ぐな……」「へ?」

女子十一楽坊はカオス軍のあまりの同士討ちつぶりに飽きてしまって好き勝手に話をし始めていた。

「だつて……飽きたんだもん。一向に決着が着かなくてつまんない!……ほら?よく言うじやない女心は秋の空つて……」

「それ違う。つーか『イシ』らお前とチビを除けば全員男だから！まあ良い…こうなつたら我が軍で一番若くて強いティナちゃんを仕向けてやる！…」

堂々と言い放つカオス。『スモスはやや呆れながら…

「ティナちゃんって…お前、そんだけでかい体格で“ちゃん”は無いだろ！」

取り敢えずシッ『…』…

「…といつかそのティナちゃんってあの娘なんじゃ？」

『スモスがティナを指差す。十一楽坊の中によく見ると楽しそうに皆と混じって話をするティナが居た。どうでも良いが…ついでに見るとその中には『ゴルベーザも居り弟達と一緒に楽しそうに話してた。

「～でさーもひおばさんばつかで嫌だったの。でね、私の上司カオスがセクハラしてきて…一度辞めたいって思つてたのよね～！」

ティナが三人の『スモス軍達に愚痴を漏らす。

「え～…嘘…セクハラ？マジ有り得ないんすけど？」

フリオニールがティナに同情する。

「本当！本当…マジ有り得ない…！」

ティーダもフリオニール同様の事を言つ。

「可哀想なティナ…あ、良かつたら私達の軍に来なよ? ロスモスは女だから気持ち解つてくれるよ…」

オニオンナイトがティナをコスモス軍に誘つ。

「やうだよー来なよー…マジ大歓迎…！」

フリオニールもオニオンナイトの意見に賛成する。

「み～ん～な～…悩み聞いてくれて有難う。私、同世代の子が居なくてずっと心細かった…」

泣き始めるティナ。ずっと我慢し悩みを抱えていたのだろう。ひとりしきり涙を流した後、スッキリした顔立ちで、

「決めた!」

ティナは立ち上がりカオスに向かって…

「私、カオス軍を辞めます! 今まで御世話になりました。」

ショックを受けるカオス。

「えー! そんな…何が悪かったの? 我の何が…」

辞める理由を聞く“元”上司。ティナは悪気もなく…

「…強いて言つなら体格ですかね? むさ苦しい事じの上無くて…」

「ほぼ全否定じゃん!」

「あはは。マジウケるんですけどー!」

フリオニールがカオスの反応に笑い始める。

「カオス、あの顔…超ヤバ！」

「オニオンナイトがカオスの情けない顔に噴き出す。傍若無人なその態度にカオスは怒り…」

「人が落ち込んでる時に笑うな…貴様ら何でさつきから女子高生口調なんだ？」

「ハア…？意味解んないし！」

ティーダが呆れたようにカオスに言い、他の二人も同調しだす。

「つ…か何怒つてるか解んないし！」

とオニオンナイト。更にフリオニールが…

「マジ消えれば良いのに…カ…何とか。」

「ちゃんと名前を言えよ…カ・オ・スだ…さつきまで呼んでただろ…！」

カオスが自分の名を区切りながら三人に言つ。

「じゃあ、そのカ・オ・スさんよ…ちょっと話があるんだが…」

ジェクトがカオスの名前を区切りながら呼んだ。

「普通に呼べ…で何だ、話つて？」

「頼む…もうこんなの耐えられねえ…俺をアンタの軍に入れてく

れ！――！」

「ええええ～～！」

こうして、見事コスモス軍は勝利し…シャントットは満足したのか自分の世界（11）に帰っていた。ティナがコスモス軍にジェクトが力オス軍に入れ替わった事でまた新たな争いが出てきたのは別のお話。

↖後編↖（後書き）

次回から本編（第一部スタート）に戻ります。

君を振り向かせたい（前書き）

何とか救世主に助けられ無事逃げ延びたクラウド…彼がこれから向かうのは敵である力オス側の域だつた…

↓キーワード↓

- ・中の人ネタ
- ・ウツカリにご用心

君を振り向かせたい

「ふう。何とか撤いた。助けてくれるのは嬉しいが寄りこよつてジタンが来るとは… アイツの事だ、WOLの戦いの後にアートの誘いがあるに違いない… そう思つと。」

クラウドは想像し身を震わせた。

「もう済んだ事だし… これ以上の想像は無駄だ。… どうするかな？ これが…」

辺りを見回してると…

「おや？ 見かけない小鳥だね？ 君は誰だい？」

アホ毛の銀髪の青年がクラウドに声を掛けってきた。

「お前は… 愚者…」

「違つ！ 愚者じゃない“クジヤ様”だ。濁点の位置がおかしいよ…！」

「！」

アホ毛… もと“クジヤ”はクラウドの名前違いに呆れつつ腹を立てる。

「全く、困った小鳥だね。… ん？ 何で君、僕の名前を知つてるんだい？… あれ、君… 何処かで会わなかつた？」

「… じ… じ… とクラウドを見るクジヤ。

「ええ？ 今、初めて会つたと思つかな…」

見ていたクジヤが突然思い出したかのよう…

「あ、君は暗闇の雲だよね？」

「違う…クラウドだ。何での痴女と一緒になんだよ…。」

今度はクラウドがクジヤに怒り出した。

「うん…クラウドってあの武器になりそうなアスタイルの人だつ
け？」

「ならねえよ！いくら髪固めても刺せねえから…。」

クジヤのペースにどんどんハマつていいくクラウド。クジヤは正体を
明かしたクラウドに今更な疑問を投げた。

「で…何で、そんな格好してんの？」

「…俺も解んない。何でこんな格好してんだろうな？」

軽く現実逃避に陥る。

「…しかもこの格好のせいでジタンに田付けられるし…」

「…アンタ、ジタンを誑かしたつて？」

“ジタン”に反応したクジヤが先程の穏やさとは違ひ殺氣の帯びた
声でクラウドに言つた。

「ひ、人聞き悪い事を言つたな！あつちが勝手に氣を持つただけだろ

？」

「勝手に？僕の弟を誘惑しといて何たる言い訳を…」

益々殺氣立つクジャ。

「誘惑してねえよー。氣色悪い事を… そんなに氣になるなら…」

此処で言つてはいけない事をクラウドは言つてしまつ。

「氣になるなら、アンタだつてやれば良いだろー。女装を…」

「アハハ… と息を吐くクラウド。すると、

「… それでジタンは僕に振り向くかな?」

クジャに言われふと我に帰る。

(はつーしまつた。ついカツとなつたから変な事を言つてしまつた
!—)

だらだらと嫌な汗が流れてくれる。沈黙に耐えかねたのかクジャがまた問いかけてくる。

「さつきから何で黙つてるんだよ。ねえ振り向くかな?」

「…振り向くんじゃないんですか…」

言つてしまつたものは仕方無こと半ば投げやりに返すクラウド。

「本当に…? さうだよねー。ジタンは君みたいな奴にも惚れたんだ… きっと大丈夫だよね? よしー! 僕も女になるぞ。」

「あはは…。頑張つて下さー…。」

乾いた笑いが出る。

「有難うー。君と話せて良かったよ。じゃあ僕は忙しいから…これでー。」

クジヤがクラウドの元から去っていた。

「…。何て言つた…ジタン。すまんー。」

クラウドは本気でこの場にいないジタンに謝罪した。

君を振り向かせたい（後書き）

この話で暫くクラウドの出番はありません。

代わりに秩序組がいっぱい出でています。第一部はジタンが主役です。

幕開け（前書き）

クジヤに変な事を教えてしまい、後悔をするクラウド。一方その頃、ジタンもWORLDから何とか撤いた所だった。

～キーワード～

- ・Mr.フリーダム登場
- ・中の人ネタ（但し本人ネタではない）

「ああ……しつこかつた。何とか撒いたか……ありやあ～当分奴の前に表れない方が良いな。」

ジタンがそんな事を思つてると…

「お～い！ジタン。」

「よつ！バツッ。」

バツッがジタンの所に駆け寄つてきた。

「どうしたんだ？こんな所で？」

「聞いてくれよ！バツッ。大変、大変なんだよ！…女の子がWOOに襲われてたんだよ！…！」

女性が襲われてる所を手振りしながら伝えるジタン。

「何だつて？その娘は今どうして居るんだ？」

辺りをキョロキョロ見回しその女性を探す。

「ああ、俺が助けたんだけど…怖かつたんだろうな、逃げちゃつて…」

しゅんとなるジタンにバツッは…

「ジタン…こくら助けたからついてすぐ”お持ち帰つて”はマズイだろ？そりゃあ逃げるよ。」

「してないし！何で俺が襲つて逃げたみたいになつてんだよ……アホか！！！」

「違うの？」

「違うわ！WOLに襲われてた所を俺が助けたんだよ。あれループしてる？鬼に角…お陰で俺もWOLに目付けられて…」

ハアハアと息をまくし立てながら喋るジタン。

「WOLは何でその娘の事を襲つてたんだろ？」

「さあ？ そういうや力オスの手先とか言つてたよな…取り敢えずWOLより先にあの娘を探さないと…今度こそ…」

言葉には出さなかつたが悪い方向に行くのは確かだ…とバツツも判断して…

「解つた！俺も探してみるよ。他の仲間達にも声掛けといった方が良いかな？」

「そうだな！早くしないと青鬼が来るし…」

焦りながら言つジタンに“青鬼”について聞いてみた。

「？…青鬼つて何だ？」

「…実はな。WOLの事なんだよ。」

小さなヒソヒソ話でバツツの耳に語りかけたが、バツツは大声で笑う。

「あはは！WOLが青鬼つておかしいな…！」

「しつ！声大きいよ。見つかつたらどうす…」

ガサガサ。

後ろの方から物音がし振り返ると…

「みづけたーククク…。」

「ギャアアア！」

WOLが立っていたので二人は悲鳴を同時に上げた。

こうして、鬼ごっここの幕が開けた。

鬼ごっこ（前書き）

遂にWOLに見つかつてしまつたジタン。バツツの大きな声のせい
でまたも鬼ごっこスタート

コスモス：「ていうか私の出番は何処行つた！」

～キーワード～

- ・ブレまくりのWOL
- ・コスモスの出番は少し先

鬼「」

「今度こそ、息の根を止めてやる… ククク… あははは。」

笑いながら言うWOLに怯えるジタン。

「怖い。怖いから！」

「WOL！ 落ち着けって…！」

バツツがただ事では無いと感じ一人の間に割つて入る。

「あー馬鹿…」

ジタンは自我を失つてゐるWOLとの間にいるバツツを制止しようと遅かつた。

「ほほう… バツツ、お前もこの裏切り者の仲間か？ ならば一緒に血祭りにしてやるわ。うふふふ…」

（激怖つ…）

WOLに對して一人は同じ意見を心の中で言つた。

「あの野郎、完全に逝っちゃってんな…」

「…ああ。普段笑わない分キレた時に反動が来るのかかもしれないね…」

二人はヒソヒソと話し…

「」
「そうなら…」
「そうだね！」

WOLに背を向け、掛け声を二人合わせて…

「せーのー！」

ジタンとバツは一目瞭然にその場から去つていく。

「あははは。何処へ逃げても無駄だ！例え水や火が来ようと地獄の果てまで追い詰めてやるー！あーっははははは。」

二人の行動に気付いたWOLが物凄い早さで追いかけてくる。WOLのセリフにバツは…

「何か某皇帝みたいな台詞を吐き出したよ…」

走りながらジタンと話す。

「どんどん笑いが増えて来てるな…なのに目が笑つてないのは何故だろ？」

「本当に…取り敢えず、一手に分かれて仲間達にも知らせよ！」

「ああ。そうだな…」

二人は心を一つにし…

（鬼が来たと…）

ジタンとバツはそれぞれ別の方に向に逃げていく。

「一手に分かれるとは考えたな…だが安心するが良い…片方を潰したとしても一方もまた潰すからな…あーっはははは！」

どうやらジタンから先に潰すらしく後を追つてきた。

半ば泣きながら走るジタン。

「ジタン！逃げてろ…すぐ仲間連れて来るから…！」

マジで!!早く頼む!!!書類持しよー!!!!」

青鬼に反応したWOLは笑いながら肯定する。

「青鬼とは私の事か？ククク… 今の私にピッタリだな。… イヒヒヒ

てるんだけどー。」「

笑いについてピクつと反応したWOL。

笑いが怖い？普段から笑つてゐるであらう。もう、ジタンつたら

卷之三

「絶対に逃げ切つてやる……！」

果たして逃げ切れるだろうか？

最初の脱落者（前書き）

キレすぎてキャラすら掴めなくなつたWOLさん…彼は元のブレない光の戦士に戻るのだろうか？

→キーワード

- ・脱落するのは？
- ・狩人WOL

最初の脱落者

仲間の元に辿り着いたバツツは今までの経緯を簡単に話した。

「ジタンがW.O.に襲われてる?」

「何で?僕達は仲間なのに?」

フリオニールとオニオンナイトは信じられないといつ顔をしそれぞれ意見を述べた。

「ジタンが女の子を助けたのが気に食わなかつたらしいよ…いつも事なのにね?」

バツツはジタンの述べた経緯を覚えていないのか端折つて仲間達に話したらしい。

「W.O.はもしかしてその娘の事が気になつたんぢやないんすか?」

ティーダが軽い冗談を口にする。

「どうかな?それより早くしないと…ジタンがジタンが…青鬼に…」

バツツが答えると同時にジタンの身を察じていた。その時…

バキ!

何かが折れる音がし皆が振り向くとW.O.がいた。

「うふふふ…もう一匹の方みつづけへた。ジタンめ…流石は盗賊。」

足の速い奴め 「

ジタンにまんまと逃げられ野生の勘で此処まで辿り着いたらしく。笑いながらも目は狩人の如く光っていた。

「……。あれは本当に「W.O.」だよな?何か色々変になつてないか?」

引きながら「W.O.」のフリオーナーを引く。

「……。何か凄まじいオーラを感じるんだけど……」

ただ者では無いオーラを感じ取るオニオンナイト。

「……。あれに追つかれられば誰でも逃げりますよー。」

ティーダは大声で言つと

「「ゴチャヤゴチャ」つるせえな!ケケケケ……。皆まとめて破壊だーー!」

W.O.が剣を振り上げる。バツツがまたセリフについて……

「今度は某ペロロのセリフが出てきた。」

「言つてる場合かーほら逃げるだーー!」

フリオニール達は走つて「W.O.」から離れようとする。

「あー待つてよー!」

オニオンナイトが一步遅れて走る。

「ネギ坊。早くするつす！遅れたら殺されるつすよーーー」「そんな事言われたつて…うわあー！」

オニオンナイトが石に躊躇してしまつ。その隙を突きWOLがオニオンナイトに襲いかかつてくる。

「ククク…まずは貴様からだ！」「ネギ坊！危ない！！」

オニオンナイトをティーダが庇いWOLの攻撃が当たつてしまつた。

「うわああ！」「ティーダ！」

フリオニールがティーダに声掛けた。

「あつはははは…まずは一人 次は誰かな？」「俺は…も…う…駄目…だ。…今の内…は…や…にげ…。」

瀕死の状態でWOLを止めるティーダ。

「くつ…離せ…私の邪魔をするな…！」「ティーダ！」

オニオンナイトがティーダに駆け寄るつとするのをフリオニールが引き止める。

「駄目だ！もう手遅れだ。すまない…ティーダ。」「ネギ坊、ほら行くぞ！」「でも！」

バツツは未だに駆け寄りつくるオーランナイトに説得する。

「でも……じゃねえよ。アイツが命懸けて守ったんだ。お前は生き延びないと……」

「うん。解ったー。ゴメンね、ティーダ。」

ようやく諦めたオーランナイトはティーダに謝り仲間と一緒にその場から去っていた。

「……あ……生き……延びろ……よ。」

「ええいー離せーーーこの死に損ないがーーー！」

いつして、脱落者が1名出た。

瀕死（前書き）

脱落者が出てきた鬼バッジ。ティーダは無事なのだろうか?
→キーワード

- ・コスマスにも制止不可（但しわざと止めなかつた節あり）

「やつと力尽きたか。さてと他の奴らも早く狩らなくちゃ うふふふ…。」

WOLは狩人の如く目を光らせながら去っていた。

「……。イテテテ！あ～、何とか行ってくれたな。…怖かった。」

ティーダは見た目より傷は浅いもののHPが赤くなってる為、回復を要する状態であった。

「早く、皆と合流したいっすけど… WOL怖いし…回復しないと今度こそ死ぬし…」

「はあ～、やつと出番来た！WOLの野郎…私の出番奪いやがって…」

…

突然、コスマスがティーダの前に現れた。

「うお！コスマス…アンタいつたい何処から湧いてきたんっすか？」
「湧いたって言うな！…それよりティーダ、傷は大丈夫？HP少な

そうだけど？」

「大丈夫な訳ないっす！WOL本当に手加減知らなくて…」

痛そうにコスマスに言つティーダ。

「あの状態のWOLに手加減つていう言葉はどうかと思つ…」
「そ～いやコスマス、その場に居なかつたのに何であの状態のWOLを知つてんすか？」

素朴な疑問をコスモスに投げかける。

「居たよ。アレになる前から。」

「……。どうして止めないんすかー…こつちは酷い目に遭つたんすよーーー！」

余程怖かつたのかコスモスに怒るティーダ。

「あのねーーー流石にヤバイなと思って私だつて止めようとしたんだけど…」

—回想—

「ちょっとWΟーーーもう止めなさいーーー！」

「コスモス…どうして止める?さてはお前もあの娘に毒されたな!
ならば斬るーーー！」

「キヤアアアアー！」

コスモスは瞬間移動を使ってWΟーから逃げた。

「…つてなつた訳。アレを止めるの私には無理だわ。」

肩を竦めて言うコスモス。

「確かに。コスモスはノンプレイヤーキヤラつすもんね… イテテテ。
そうだ!コスモス、用事があつて俺の所に来たつすよね?ポーション持つてないつすか?」

傷が癒えてないティーダは未だにHPが赤い。

「私は持つてないけど……“この人”なら持つてるわよ?」

コスモスの後ろに表れたのは…

回復方法（前書き）

ティーダの前に表れたコスモス…彼女が連れてきた人物とは？

→キーワード

- ・軽くネタバレ（10）
- ・漢らしい回復手段（絶対に真似しないで下さい）

回復方法

「これはこれは。 ジェクト様の所のお坊ちゃんではあつませんか？」

瀕死の息子にからかいながら歩み寄る。

「親父？ 何で此処に？ コスモスー、どうこう事だ？」

ジェクトの部屋に怒るティーダ。 親子なのにあまり仲良くないのだ。

「逃げてる時に“偶然”出会ったのよ。」

「“拉致”つただろ？ おめえ、神様の癖にやる事滅茶苦茶だな？」

ジェクトがコスモスを見て呆れながら言つ。

「お黙り！ 的がいっぱい居れば、その分生存率が増えるのよ。」
「ちだつて生き延びるのに必死なんだからね！！」

「的つて…おめえ、そんな事で俺を連れてきたのか？」

「うつさいわねー！」の裏切り者！－！」

コスモスはジェクトがカオス軍に寝返った事を言つ。

「裏切り者つて…あんな事をされりや誰だつて逃げるだろーが！」

ジェクトも向となくだがトラウマに近かつたせいか覚えていた。

「だいたい、俺みたいな奴の女装なんてPAPUWAのウマ子じゃ
かならねえだろ？ 誰が期待すんだよ…！」

「ウマ子のファンなら気に入るわよ。」

「微々たる数しか居ねえよ！そもそもアレを女として見るかも怪しいし…中の奴（声優）は男じゃね～か…！」

「スモスにて反発するジヒクト。」

「見た目じゃなく心の目で見るのよ…きっと…」

「心の目つて…結局、現実に目背けてるだけじゃ…」

「あの～、そろそろ回復してくれないっすか？ ハヤキツイんすナビ？」

なかなか話が終わらんそうに無いので間にに入るティーダ。

「ちつ…ちつと待つてな…！」

ジヒクトが口にボーションを含んで…

「？」

何をするのだろうと見てたら、いきなりティーダに向かって…

「ふはあ～！」

口に含んだボーションを噴いた。びしょびしょになったティーダは…

「…てめえ、何で口に含んだ？そのまま回復対象に掛けるんだよ！ 使い方は前に俺から教わったよな？」

「あん？ そりだっけ？ 良いじゃね～か…効果は同じなんだし…」

「寧ろ、アンタの口から噴いた時点でマイナスだつ～の一馬鹿だろ？ お前…」

馬鹿と言われてカチンときたジエクト。

「親に向かつて何を言うか！もつ一回教育してやるつか？」

「殆ど家に居なかつた癖に！教育というか旅だつてアーロンの方がよつぽど世話になつたつすよ！！」

「俺だつてシンに取り憑かれてたから仕方無えだろー・シンのままお前に会いに行つたら泣くだろ？」

「そ、言つてんぢやない！…もうアンタとはケリ付けねえと駄目だな。」

「泣き虫が何言つてんだか…解つた。ケリ付けようか？「望む所だ～！」

こうしてティーダのHPは回復したが親子の絆は大きな溝が出来てしまつた…

「まさか…あのスキンシップ（回復方法）を実行するとは…冗談のつもりだつたのに…」

コスモスは笑いながら親子喧嘩を見ていた。

回復方法（後書き）

親父がもしするならこの方法だうつと思へ書きました。

大いに鬭争を楽しもうではないか！（前書き）

回復をし復活したティーダだったがジェクト（というかコスモス）のスキンシップのせいで絆に亀裂が生じた為に再戦不可能に…結局脱落者2名（親父含む）。その頃カオス側では新たな動きが…

～キーワード～

- ・行かなきや良かつた…
- ・偵察 見捨てる

「今、コスモス側は内部紛争が起きてるらしい。叩くなら今だろ？
」

皇帝がガーランドに話す。

「そうだな。最近戦いが無くて腕が鈍りそうな所であつた。丁度良い…我らが直々にあちらに行こうではないか？」

ガーランドは自ら敵陣に乗り込む事を提案する。

「其れは名案だな。虫けら共の恐れをなした面を想像するだけで…行くぞ！ガーランド！」

二人はカオス側を後にし、敵陣であるコスモス側へと出掛けた。

「しかし、トラップメイカーの貴様がわざわざ現地に赴くと言つ出すとは…何を企んでおる？」

ガーランドは皇帝に疑問を投げる。

「別に…企んでなどいないさ。ただ私は虫けら共の屈服する姿が見たいだけ…それだけだ。」

「ふん！まあ良い。聞いた所で貴様がはぐらかすのは解つておつた事…ただ儂の戦いの邪魔だけはするなよ？小僧。」

「言つてろ。老いぼれが。」

「人が憎まれ口を言い合つてゐる時に…

「ん？ あそこ見えてる青い輩は… 我が宿敵ではないか？」

ガーランドが向こうに見える人物に気付く、近付こうとする。

「まさか一人で居るとは… ククク。一対一、好都合だ。」

皇帝の言葉に怒るガーランド。

「貴様！ 我が宿敵は私が相手だ！… 言つた筈だ… 手出しあるなど。

」

怒っているガーランドを大げさに両手を広げながら…

「おお… 怖い怖い。 “ 戦闘狂のガーランド様 ” がお怒りだ。では私は貴様らの戦いを見物するとしようか…」

皇帝は近くの物陰に隠れる。ガーランドはWOの元へ行き、高々と宣言し…

「我が宿敵よ。貴様に会えて嬉しいぞ… 大いに戦おうではないか？」

「お前は、ガーランド！」

ガーランドに気付いたWOは驚く。

「ふふふ…。貴様らが来ないお陰で儂の腕が鈍りそうでな… だから儂の方から来てやつたわい！」

「そつか… それは良かつた。」

まさか宿敵からそんなセリフが出てくるとは思わず嬉しがるガーランド。

「がははは…貴様からそんな台詞が出るとは嬉しいぞ！我が…」
「あはははは！ 2匹目ゲット！」

WOLの様子が豹変したのに驚き、絶句する。

「……。あれ？ 貴様そんなに笑顔だつたつけ？」
「何を言つておる。私はいつも笑顔であるの？ 全くどうでもいいつも…
も顔ばかり言いやがつて…」

プリプリ怒るWOL。

「あの～、WOLさん？」
「ああん？ てめえの面を叩き割つてやんよーヒヤヒヤヒヤー…」

WOLがガーランドの面を両手で掴み物凄い力で外そうとする。

「ギャアアアー！ おい、皇帝…見てないで助けろよ…！」
「お前さつさ邪魔すんなつて言つただろ！」

火の粉を振られた皇帝は…

「…宿敵の戦いに水を差したら悪いな。では…私はコレで…」
「てめえ、見捨てやがったな！ 後で覚えてろよ…！」

去っていく皇帝の背中を見送り、取り残されたWOLとガーランド。

「良かつたな？ コレで邪魔者は居なくなつたよ？ ゆっくり狩りが出

来るじゃないか…ウフフフ。」

「降参するから!命だけは…」

WOLが剣を振り上げ…

「問答無用」

「ギャアアアア!」

ガーランドに下された。的が増え、犠牲者も増えた。

脱落者3名。

大いに闘争を楽しもうではないか！（後書き）

戦闘狂のガーランドは作者が付けた通り名です。実際は呼ばれません。

ん。

剣のダンス（前書き）

自ら戦地に赴き、宿敵に心躍らせ挑んだガーランドさん。見事返り討ちに逢つたとて

～キーワード～

- ・円のワルツ
- ・ひぐらし

剣のダンス

ガーランドを倒したWOLは上機嫌のあまり鼻歌を歌いながら剣の血を拭き取っていた。

「フンフンフーン コレで2匹ー嬉しいな…ウフ。」
(氣色悪っ!)

ガーランドは瀕死でありながらも辛うじて意識を保っていた。剣を拭き終わったのか踊り始めるWOL。

「まだ居るかな?かな?」
(うわあ…ひぐらしのレナが此処にいる…)

狩りのダンス(?)をしていたWOLがピタッと動きを止めた。

「足りない。…足りないな…もつと…もつと…狩らないとね?
母さんに言われたもんね…」

(某英雄みたいな事を言い出したよこの人…)

「あ、そ、いやコイツ以外にもう一匹…黄色いの居たつけ?ソイツを狩りに行こうつと」

WOLはその場を去っていた。

「瀕死だけど…助かった。」

ガーランドは瀕死ながら呟いた。

「その頃、バツツ達は…

「此処まで来れば大丈夫だろ？。ジタンは何処行つたかな？」

辺りを見回しながら安全確認をするバツツ。

「怖かつた！何あれ？本当にWOLなの？」

オニオンナイトが先程の体験を思い出しながらバツツに尋ねる。

「多分…俺も自信無い。」

バツツにしては珍しく弱気な発言。

「あのWOLが笑つとはな…怖かつたけど…」

フリオーナークもオニオンナイト同様、信じられないという感じで述べる。

「これからどうしよつか？」

「そ、だな…」

オニオンナイトがバツツに聞いてみると…

「お~い！」

「ああ！ジタン…無事だつたか！…」

ジタンがバツツ達に近付いてきた。よく見るとセシルやスコールも一緒だ。

「WOLが笑つてゐるって本当？」

「見たかつたな… WO」の笑顔！レア…」

セシルとスコールが珍しいモノを見たかつたと言わんばかりに皆に尋ねる。

「お前ら… そんなに見たいなら見に行つて来いよ！」

「そ、だぞ！ こ、つちは死ぬ思、いしたんだからな、う…！」

「ついでにやられてきなよ。」

順にバツ、ジタン、オニオンナイトが危険な目に遭つたのを知らない二人に腹を立てながら言い放つた。

「嘘！ 嘘だよ… それにティーダがやられたつて本当かい？」

セシルが謝りながらもWOに倒されたティーダを心配する。

「ああ。俺達の目の前で…」

「俺達の為に瀕死なのにWOを止めてくれたんだ…」

フリオーナーとバツが答える。

「そ、うか… 大変だつたな…」

ただ事では無いと感じたのかスコールもセシル同様に心配する。

「… あれ？ 何でスコール達はティーダがやられた事を知つてんの？」

オニオンナイトが居ないはずの一人が何故知つてゐるのか聞いてみる。

「コスモスから聞いたんだ… でもコスモスが助けに行つたから今は

「無事らしい…」

「安全な場所で匿つてるんだって… ティナが看病してくれてるって言つてたよ…」

スゴールとセシルがコスモスに会つて話した事を皆に伝える。

「其れは良かつた！ ティーダも生き残つてるんだな…」

バツツが胸をなで下ろしながら言つ。

「まあレディにあの青… WO」は見せられねえよな？」

笑顔が怖いWOを見てなくて良かつたとジタンも言つ。

「そうだな。確かに笑顔だつたけど… 田が笑つてなかつた…」

「うん… 田がね…」

フリオニールとオニオナイトもジタンに同意する。

「兎に角逃げ回つてばかりでも何れはこっちが力尽きる… 何か作戦を立てようぜ！」

ジタンが皆に作戦会議を開こうと提案する。

「おおー… そーだなー！」

「うして作戦会議は始まった。

剣のダンス（後書き）

—本当は—

コスモス：「バカ親子はほつといて良いとしても、ティナがやられたらトレードした意味無いもんね。よし、ティナだけ匿つて私はアイツらの鬼ごっこをこつそり観戦しよう。」

今更なネタ。

～キーワード～

- ・職権乱用
- ・嫁

番外編・スコールの受難

「まあ！何よその態度！－アンタだつて心中で自分と会話してんじゃないの！－！」

スコールのアンケートの回答を見て腹を立てるコスモス。

「！？…何で、知ってる？」

思つた事を声にあまり出さないのでスコールは驚く。

（まさか、口に出てたのか？）

「うふふ…私は“神”様だもの。これ位チョロイチョロい

「単なる職権乱用じやね～か！何が神だ。ふざけるな！－！」

心の会話を盗み聞きされ怒るスコール。

「人聞き悪いわね。この老け顔！私の力で8より若返らせてあげたのに何て態度なの？」

「別に頼んでないし…そもそも任務に戻つて良いか？」

コスモスの意見を無視して何処か行こうとするスコールに…

「まだ話は終わっていないわよ！リノアだつけ？あのヒロイン…あんな誰からも嫌われるような娘をよく愛せるわね？人選悪いんじやない？…っていうかリノアに尻敷かれてる癖に…けつ…！」

理不尽な態度にキレるコスモス。すると…

「すいません、俺が悪かったです。帰つたら叱られるんで、それ以上つりの嫁の文句言つの止めて下さい。」

スコールは泣きながら口スモスに土下座しHンディングで8の世界に帰つた後にリノアにボロられたのは言つまでも無い。

いつかアンケートの方も小説にしてまとめたいと思います。

作戦会議～壱～（前書き）

作戦会議開始。

～キーワード～

- ・息ぴつたり
- ・ボク（。 。 ）ーン

作戦会議へ壇へ

オニーオンナイトとジタンが進行役になり会議を開始する。

「では、これより“打倒W.O.”の作戦会議を開始致します。」

オニーオンナイトが皆に声を掛ける。

「全員起立、礼、着席。」

「皆さん、意見がある人は手を挙げて下さい。」

ジタンがオニーオンナイトに倣つて声を掛ける。

「…はい。」

「はい！」

「はい。」

「はい。」

順にスコール、バツ、フリオニール、セシルが手を上げる。

「では一番早くかつたスコールさん、どうぞ！」

ジタンがスコールを並べるがスコールは困ったよつて…

「…え？俺は良い。バツ、どうだ。」

「俺も良いよ。セシルどうだ？」

「困ったな。僕最後だったのに…フリオビツだ」

「じゃあ…俺が。」

と言つて…

「じゅわじゅわー。」

フリオーナーク以外の3人が譲る。

「……。」

ジタンは黙つて階を見ていた。

「真面目にやれ！僕ら命掛けなんだよ？ダチョウ俱楽部はまた今度で良いからーー！」

オーランナイトが進行役らしく階を見る。

「ちえー！まんねえの……ちょっと緊張感を無くせりつと思つたの、真面目だな？」

バツツが口を尖らせながら言つ。

「あまり、肩に力掛けすぎると却つて悪いと思つてな？悪気はなかつた……スマン。」

スコールは少し申し訳無さそうにオーランナイトに謝る。

「あ、こいつが「アーメン」もつと繋るべきだったね……」

オーランナイトは氣を使つて貰つたのに氣付くべきだったと恥じるが……

「良一んだよ。」

「グリーンだよー。」

セシルが言つと3人が合わせて叫ぶ。

—

黙り放しのジタン。

「...和んでる所、悪いんだけど... それそろ止めるつよ... ジタンがさ
つきから黙つてて怖いんだけど...」

オーナンナイトがいつも明るいジタンの黙りつぶりに異常を感じている。

「… そうだな。 そろそろ止めないと本気で怒りそうだな…」
「ジタン。 悪い！ そんな怒んなつて… な？… ジタン？」

フリオニールがオニオンナイト同様に異変に気付き、バツツも悪い
と思い相方に声を掛けるが…

「…………ふう。」

噴き出す声が聞こえた。

？」

皆がぽかんとしてると…

ジタンの笑いが収まるまで作戦会議は一時中断に…

作戦会議へ壇へ（後書き）

コスモス曰わく…

「ジタンのツボが解らん…何処が面白いのやら…」

作戦会議～武～（前書き）

「」のままでは力尽きてしまい「WOL」の暴走を止められないと思つた一行は作戦会議を立てる…しかしこの作戦会議。ある男によつて惨劇を更に悪化させる事になるとは誰も知らない…

～キーワード～

- ・勘違いスタート
- ・WOLが青鬼化した理由

作戦会議へ戻へ

「では、今度こそ改めまして。会議を…」

「ひひやひや。」

立て直して会議を始めるオーランナイトに対し、ジタンが未だに笑いが収まつていなじよう…

「お前…退場。今すぐ消えろ…」

オーランナイトが怒ると…

「ひ～…「ゴメン」「ゴメン。おほん！ネギ君、続きを。」「…つたく。では作戦会議を行います。意見のある人は挙手して下さい。」

今度こそ気を取り直し、意見を聞く。

「…はい。」

「ではスコールさん、じひね。」

手を上げたスコールを当てる。

「実は、さりと見たんだが…「ひひやらガーランド」と皇帝が「ひひ」と来てゐらし…。」

「何だつて…其れは本当か？」

皇帝と因縁のあるフリオーラルが声を荒げる。

「うん。あの目立つ黄色いのと愛嬌のある面を被つた鎧のオッサン二人は見間違えないよ。」

「オッサンって…まあ確かにそつだが…セシル、君の口からそんな言葉が出るとは思わなかつたよ。」

セシルの意見に若干引くフリオニール。

「で？ オッサン二人は何しに此処に来たんだ？」

「もしかして、二人つきりだしデーターとか？」

ジタンが疑問を口にするとバツツが冗談を言つ。

「流石に其れは無いだろ～？」

男同士でそれは有り得ないと否定するジタンに、セシルが…

「いや…有り得るよ。だつてその後、WOLが来て鎧のオッサン嬉しそうだつたし…」

「…まさか…浮氣か？」

煽るフリオニール。

「其れっぽかつたよ。だつて、遠目で見てたけど…皇帝が泣きながら去つていつて…その後WOLが怒つてガーランドを斬つてたよ。」

セシルが目撃証言を皆に話す。

「アイツ…いつの間に二角関係に…ていうか何で此処をデータースポットに選んだだろ？」

「さあ、それは僕にも解りかねるな…ただ僕の憶測だけど…カオス

軍の人達に見られたくなかったんじゃない? だつてコスモス側と付き合つてゐるんだよ? 見られたく無いよね?」

バツツが何故こいつに来てデーターするのかを尋ねると、セシルが憶測で答える。

「あへ、なへるー。」

盛り上がる話にスコールが…

「お前ら… そろそろ、その話止めてくれないか?」

「へ? ど~して? 良いじゃん!」

ジタンが首を傾げた。

「あのな… こにお子様が居るんだぞ? 流石に… 三角関係は… (そこが問題じやないと思つた)…」

スコールの注意に、隠れながら皆の様子を伺つてゐるコスモスが心中で突つ込む。だがオーランナイトは…

「ねえ、セシル。それからどうなつたの? ガーランドとWOL?..」

「あれ? 少女漫画でも読んでんの? ネギせん…」

スコールの意見を無視しセシルがオーランナイトの問い合わせに答える。

「うへん、その後ねWOLが… 皇帝の逃げてつた方向を追つてたよ。」

「それはヤバくないか? WOLの奴… そつかーそれで怒つてたのか…」

フリオニールがWOJが嫉妬で怒つていてると解析する。

「で、提案なんだけど…三角関係の泥沼の果てを今から見に行かな
い？」

「それ…良いな。賛成！ 皆も行くよな？」

「ああ、勿論！」

セシルの提案にジタンが答え、全員一致で賛成する。こうして勘違
い三角関係はスタートした。

作戦会議▼式▼（後書き）

ちなみにB-1展開ではありません。あくまで勘違いなので…念の為！

ぱー（・＼・）＼（前書き）

三角関係を見に行く一行・移動の途中でバツツジタンはある事に気付く。

→キーワード

- ・漫才っぽい
- ・まだおかだ
- ・のネタは2話後に続く

「はー(。^。)ー」

「なあ、ジタン。俺、思つたんだけど…」
「何だよ? いきなり…」

バツツがジタンに話す。

「W.O」の事を“青鬼”って呼んでたじやん? あれ、ガーランドと会う時あだ名じやないかな? ほら8度アーヴァインがセルフィイを“セフイ”って呼んでるみたいな感じで。」

人差し指を上に向けながら話す。

「ああ! それで青鬼つて言われて怒つてたのか!! バツツ、今日冴えてるな。」

「だろ? 俺も言つて吃驚した。」

珍しく冴えてる相方に警めるジタン。

「じゃあ、W.Oはガーランドの事を何て呼んでんだうな?」

呼び名についてバツツに意見を求める。

「鎧のオッサン?」

「あだ名じやないな… つかそれ呼んだのセシルだよ。」

返答をすぐにされ、また考え込む。

「戦闘狂のガーランド?」

「それは通り名だろ、あだ名じゃない…」

「M・フリーダム?」

「お前の事だろー。」

更に考えてみたが…

「…何て呼んでたんだろうね?」

「俺が質問したのに!…ガーランドって長えから“ガー”か“ラン”のどしきかじやねえの?」

ジタンが呼び名に区切りを付けてみた。

「“ガー”だとペットみたいだし…“ランド”だと遊園地みたいだね?」

バツツはどつちこ区切つても変だと言つた。

「そ～だな…どしきだらうな?」

どしきかだらうと思つていたが…

「案外、“ガーン”とかだつたりして?」

「効果音かよ!“ガラガラ”もありつか?」

「閉店ガラガラ。」

最早、呼び名ではなくなり…

「まだおかだの岡田みたいだな…じゃあもつ“岡田”で良いや。」

「そ～だね。面倒臭いし…」

こうしてガーランドあだ名は決定した。

ぱー（。 A. ）／＼（後書き）

岡田の“ぱあ～”のポーズを顔文字にしてみましたが…上手く表現出来ません（爾 爾）

勘違ことこのじゆの三角関係（前書き）

バッツとジタンが話をし終えたと同時に現場に到着。

- ・キーワード
- ・WOL役：セシル
- ・皇帝役：フリオニール

今回、彼らは遠目で見守ってる為に会話が聞こえません。彼らの妄想をお楽しみ下さい。

勘違いといつ名の三角関係

「遂に追い詰めたぞ……皇帝。」

「くつーこれまでか…」

WOLが皇帝に剣を向けながら話す。

「よくも私のガーランドを奪つたなーこの蛇男ーー！」

WOLが怒りながら皇帝に訴える。

「何だと？貴様が奪つたんじゃないか！此処ならカオス軍共にバレないから…つと言つてガーランドが連れてきたんだ。そしたら貴様が表れ、ガーランドは嬉しそうにお前の元に行つたではないか！！」

皇帝も負けじとWOLに怒鳴る。

「それは私が眞の思い人だからだろ？人のせいにするな…だいたい私の方が先だぞ！」

「何を！こつちは同僚だから私の方が先だ！！」

「貴様、シリーズが違うのに…もう良い。此処で貴様を殺せば浮気相手は居なくなる…」

WOLが皇帝に近付き剣を振り下ろすとする。

「いつたい何を言つて…はつーその返り血は？もしかして…」

「ああ。そうだ。浮気をする男には制裁を…ガーランドはもうこの世に居ない…そして私はお前も制裁しよつ…覚悟するが良い…」

間一髪の所で避ける。

「へほあー！」

その後のW.O.の攻撃も得意の罠で何とか回避し…皇帝は逃走するが、逃げる途中に彼はコスマス軍に出会い拉致されてしまつ…果たして皇帝の運命は？

勘違ことこのつかの三角関係（後書き）

次回、皇帝とWOLの会話が明らかに！

大事な事は2回言え（前書き）

皇帝…事情聴衆の為にコスモス軍により逮捕された。

～キーワード～

- ・まだおかだ（前々回の続き）
- ・鋼
- ・すり替え（られ）たのさ

大事な事は2回言え

手足を縛られ不機嫌な顔で皇帝が言った。

「虫けら共がこの私を捕まえるとはどういうア見だ？」「ア見も何も…お前敵じやん…それより…」

フリオニールが因縁の相手に取り敢えず突っ込み、オニオナナイトが皆が気になる事を代表して質問する。

「ガーランドどーテーントしてたって本当？」

「…は？」

「俺が見たんだ。ガーランド…いや、“岡田”とイチャイチャ歩くお前らを…」

スコールが静かに意見を述べた。

「イチャイチャしてないわい！そもそも岡田って誰だよ？」

「ウルサイね…“増田”は…相方をWOLに取られたからって…」

オニオナナイトが手を広げながら大袈裟に言つ。

「誰が増田だ！“皇帝様”と呼べ！…！」
「増田”“マスタング”…否、無能大佐。」

ジタンが納得したように呟く。

「マスタングって誰だ？階級、大佐じゃないし…つか無能とはどういう事だ？」

「言葉の通り。“無能”とは使えない人の事。即ち、使えない人の事を“無能”って言うんだ。」

セシルが良い笑顔で解釈した。

「私は無能じゃない！… ていうか何故2度言った？」

「大事な事だからだよ… そんな事も解らないの？頭大丈夫？“無能皇帝様”」

オニオンナイトが自分の頭を人差し指で突つつきながら言つ。

「だから、無能って言うな… さつきから勘違いしてるようだが… ガーランドとテートって何だ？」

「え？ 違うの？」

「俺達を騙してたのか？」

バツツが驚き、フリオールが怒りながら皇帝の襟首を掴む。

「人聞き悪い事を言うなーそつちが勝手に勘違いしたのだろう？… 全く。コスマス側がピンチという事で攻めに行つたのに… 何故、私がこんな目に遭わないといけないんだ…」

ブツブツと文句を言つ皇帝にジタンが…

「それはアンタの日頃の行いが悪いからだろ？」

「だいたい、何なのだ？あの男は…いきなり斬つてくるし…笑いながら…」

「あれ？スルーされた？」

「…やっぱり今日のW.O.って敵側から見ても様子おかしいよね？」

バツツが皇帝の意見を聞き、WOLの異変を改めて実感する。

「何が原因なんだろ?... また作戦会議を立ててみる?」

「そうしようか...」

「そうだね。」

セシルの意見にジタン、オーランナイトが同意する。

「... なあ、やつきから話おうと思つたんだが...」

スコールが遠慮がちに階に話す。

「何、どうした?」

「... クラウドって何処行つたんだらうな?」

「...。」

沈黙。

「クラウドならモーリー話るじゃないか。」

フリオーナーが皿を反らしながら皇帝を指差す。

「え? 僕え?」

「そうそう、同じ金髪なんだし... 何か意見頼むよ? クラウド(仮)。」

「

セシルが黒い笑みを浮かべながら囁く。

「金髪以外は全部違うがな! つーか(仮)って何だ?」

「もう良いだろ? クラウド(仮)... それより作戦会議始めよつぜ」

「

こつしてクラウド（仮）を加えての3度目の作戦会議は開始された。
余談だがクラウドについてコスマス側は深く考へない事にした（
現実逃避）。

作戦会議へ参へ（前書き）

替え玉事件勃発。

「ではこれより、3度目の作戦会議を開始致します。何か意見のある人は挙手して下さい。」

オーランナイトの進行で手を上げたのは…

「はい。」

「セシルさん、どうぞ…」

セシルだった。

「せっかくクラウド（仮）も来ててくれたので囮…」ほつ！盾役をお願いしたら良いと思います。」

「……。異議が無いようなので決定…」

オーランナイトが会議を纏めようとすると皇帝が凄い勢いで手を上げた。

「異議あり！異議あり！！異議ありまくじりじゃ！！！」

「も～う、クラウド（仮）。そんな3回も言わなくても解るから…」

笑いながら言つオーランナイトは改めて皇帝に意見を聞いた。

「で、意見ある？」

「はい。言い出しつペが囮になるべきだと思います。」

「却下。他にある人～？」

ダメ出しされ焦る皇帝。

「ちよつ……私達は仲間だろ?」

「仲間?……ほん。今更何を言い出すやう……」

鼻で笑いながら否定するセシル。

「本来は敵だけど……今は仲間だよな!な?」

負けじと皇帝も必死で自ら弁護したが宿敵フリオーネルに邪魔されてしまつ。

「…「イイ、」いつかさびすく裏切るから皆は騙されないよ」と氣を付けてくれ。」

「はい。」

ほぼ全員が同意し、絶望する皇帝。

「お前ら~!」

「おい。何て事を言うんだ!俺達仲間だろ?」

そんな中、バツツだけが皇帝の味方になつた。

「バツツ…」

「クラウド(仮)。大丈夫!まだ手はある…俺に任せや…」

「じゃあ、バツツの意見を聞こつか。」

ジタンが意見を求める。

「ああ。俺つて“ものまね士”だろ?だからWOLの前でWOLの

真似したら戦意喪失するんじゃね~か?」

「お～！確かに。バツツ、お前今日冴えてんな～。」「だろ？俺も言つてて吃驚した」

本日2度目の誓め合いをする一人。最後にオーランナイトが皆に確認する。

「それで決定で宜しいでしょ～うか？」
「異議なし！」

「うして作戦会議は終了した。

皆様、暑中お見舞い申し上げます。

カオス側では無いことはいえコスモス側でも夏は暑かった。

「暑い…なあシャントット、風の魔法を唱えてくれよ?」

バツツが服をバタバタさせながらシャントットに頼む。

「人に物を頼む時は礼儀正しくするのが基本でしょう?」

頼まれたシャントットは不服そうだった。

「……。お願い致します。シャントット様、風の魔法を私めに唱えて下さいませんか?」

バツツは面倒だなと思いつつも一寧に言った。

「おっほっほー!宜しくてよ。えい、風よー!..」

「涼しい…イテ!イタタタ…」

バツツに石が飛んできて体中に傷が出来てしまつ。

「攻撃魔法ですかね。当然ですわ!」

威張りながら言つシャントット。

「痛かつた。もっと涼しい魔法無いのか?痛いんだけど…」

「貴方、馬鹿ですか?お望みであれば一生凍らせて差し上げましょ
うか?」

バツツの願いに呆れながら邪悪な笑みで告げるシャントツト[...]

「もう、良いです。」

バツツは丁重に断つた。

—終—

私の中でバツは阿呆の子になつてます。

手の鳴る方へ…（前書き）

打倒WOLFプロジェクト始まる。

→キーワード

・バツツの本気

手の鳴る方へ…

皇帝を縛っていた縄を解き（）と書いても手は前回自分で解いたらし
い）WOLが来るのを待つ一同。

「おー、皆。WOLが居たぞー。」

ジタンが皆に声掛けフリオーナールが合図する。

「じゃあ、例の作戦開始だな！」
「頼むぞ。バツ。」
「君だけが頼りなんだ。」
「死ぬなよ。」

スコール、セシル、皇帝がバツに呼び掛ける。

「おおー皆、有難うなーーーそれと、もし失敗したら皆逃げてくれ。

」

バツも皆の期待に応えるが如く明るく努めた。

「…うん。解つた。」
「お前も気を付けてな？」
「ああ…じゃあ行つてくるー。」

オーランナイト、ジタンも応援し…バツはWOLの前に登場した。

「お前は…」

WOLは驚いた表情でバツツを見る。

「よつ、WOL。今からお前の真似をしに来たぜー。早速だが“ものまね”開始ーー！」

バツツのものまねスタート。

「黄色いのじゃない…まあ良い。望むなら相手をしよう…はははは。

「（前略）相手をしよう…はははは。」

「どうした？かかつて来ないなら」じつから行かせてもらひつぞー。ヒヒヒ。

「（前略）ヒヒヒヒ。

次のものまねをする前にWOLが攻撃を開始した。

「とつやあー！」

バツツの頭にクリティカルヒット。

「バツツ！」

「今は駄目だ！」

「そうだよ。今は様子を見よう。」

ジタンが心配するが慌ててフリオニールとセシルが止める。バツツはヨロヨロしながらも何とか体制を整えた。

「ふんー！こんな攻撃で倒れられたら、いつもやる気削ぐからな…ははは。次の攻撃はどうかな？」

「（全略）

「何だよ？お前、さつきから私の真似をして……ええい！虫酸が走る！……虫酸が走る！……」

WOLがバツツに向かって2度3度…否、何度も頭に向かって攻撃した。

「へん…ぞまあみり…私の真似をするからいけないので…うん？」

WOLがバツツを見て一瞬怯んだ。

「……。は…。」

「？」

「あつははは～。黄色いの、何処かな？」

頭の攻撃でバツツは混乱し…

「…うわ～い 仲間だ！…一緒に皆殺ししに行こう～」
「うん。黄色いの確か、あそこに居たよ～な…発見～」
「あ！本当だ。黄色 黄色 あの娘を思に出せせる色～」
「さあ、サクッと逝つちゃって～」

皇帝の前に一匹の鬼が笑いながら近寄つてくる。

「うわあ～誰か…ってアイツら二つの間にあんに遠くに…」

そんな彼を見てWOLとバツツは無情にも剣を振り下ろす。

「じゃあね！」
「バイバイ！」

「うう……うぼあ～～～！」

こうして、脱落者4名になり鬼も増えた。

手の鳴る方へ…（後書き）

予告通りある男のせい^{バツ}で悪化しましたとぞ。

野バラは美しく散る（前書き）

殺戮の舞台男優ウォーリア・オブ・ライト。彼は殺人を犯す事三度に渡り、そのキレつぱりには多くの奇怪な行動を残したまま…未だ完全には正気に戻つてないのである。

バツ・クラウザー：WOLの真似をしていた所。WOLによつて頭を殴られ、混乱。敵と味方の区別を間違え、その後バツは現場にて完全に敵になつた。

（キーワード）

- ・檻の中の花
- ・空中フルボッコ

野バラは美しく散る

「あらすじ長えよ……しかし、まさか頭ばかり攻撃とはいえ、こんな結果になるとは……」

ジタンが吼えるように隣で走ってるセシルに言ひ。

「黄色のオッサン、盾役にもならなかつたね。無能つて強ち間違つてなかつた。」

「これからどうする？鬼が2匹ともなれば厄介だぞ？」

スコールが後ろから問い合わせる。

「ああ……そうだな。俺が盾になるから皆は逃げる。」

最後の列に走つていたフリオールが立ち止まる。

「え？ フリオ何を……」

オニオンナイトが言つたが、ジタンが遮る。

「……解つた。死ぬなよ？」

フリオールは首を逃がし自ら盾役になつた。

「俺が相手だ。」

フリオールが堂々と宣言すると……

「もう 邪魔しやがって… つまんねえな。」

「WO」が苛々しながら囁つとバツツが…

「WOしつち、先行けよ?… すぐ追い付くからや?」

「うん、解つた」

「タダで行かせるとと思つなよ?」

WOの行く手をフリオニールが遮るつとしたがバツツに邪魔される。

「相手はこっちだよ?… えい!」

「何?… うわああ…。」

バツツがフリオニールに向かつて攻撃する。

「一丁上がり~ 空中に上げてしまえばウエポンマスターなんてチヨロいね」

「何だと?貴様…」

「本当の事だろ?地上しか武器使えない癖に~」

バツツはフリオニールに空中コンボを連発し、トドメを差した。

「…終わらないでくれ。」

「これで5匹 イヒヒヒ… WOしつち今からそっちに行くからな?」

一方逃げつゝも様子を見てたジタン達は…

「あれ…俺の技をアレンジしたやつだ。エゲツねえ…」

ジタンは引きながら言つとセシルもバトルについて辛口評価する。

「空中だとフリオは魔法しか使えなくなるからね…」

「おい、ネギ！お前は足早いから先に逃げろ。」

スコールがオニオンナイトを促すが当の本人は戸惑つていてる。

「え？でも…」

「逃げられる内に逃げとかないと後でやられるぞ？スコールの言う通りにしろ！」

「そうだよ。フリオも倒されたんだ！僕らが君を守れる保証も無い。ネギ、早く。」

ジタンとセシルもスコールに同意しオニオンナイトも決意を固め…

「…うん。皆も無事に逃げて！」

「ああ。ネギ坊も気を付けてな！コスマスが居たら匿つてもうれよ！」

「…」

ジタンがオニオンナイトに言つと彼は自慢の早足で去つていた。オニオンナイトが見えなくなつた所でスコールが…

「…お前らも先に行け。どうやらSWOLが追い付きそうだ…」

「スコール！君まで…解つた。気を付けて」

「ああ。」

セシルが心配したが最早一刻を争つ事態にスコールに従う事にした。

次回、スコールvswolのバトル開始。

野バラは美しく散る（後書き）

フリオは空中になつた途端に無能になりますね……本当に、お前の武器は飾りかと言いたくなるくらいに……

余談ですが私はSonic Horror好みです。「櫻の中の花」とかミシル系はマジで名曲！

相棒（前書き）

次々に犠牲者が増えていくコスマス側（と一部のカオス側）…果たして、スコールは惨劇を止められるのか…

（キーワード）

- ・召還
- ・ゲスト出演

「獲物発見 次の獲物はお前だー！」

WOLがスコールを指差しながら叫ぶ。

「…俺のセリフを吐き出しあがつたよ…アイツ…」

聞こえたジタンは小声で突っ込んだ。

「かかって来い、俺が相手になろう。」

スコールがWOLの前を立ち塞ぐ。

「君は一人かい？なら好都合。…行くぞー」

スコールvsWOLのバトル開始。スコールはWOLの攻撃を避け挑発する。

「ふん！その程度か？」

「何を？！コイツ！…当たれ！…！」

「そこだ！」

WOLがスコールの攻撃を喰らい、カウンターをするが当たらない。

「ぐあー！畜生！…何で当たらないんだ？不愉快不愉快。」「捉えた！トドメー！」

物陰に隠れ様子を見てるジタンとセシルがスコールの優勢に喜ぶ。

「へえ～、スコールやるじゃん！」

「これなら勝てるかもしれないね？WO―が戦闘不能になれば元に戻るだろ？…何より鬼も減る。」

しかし、喜んでるのも束の間…

「WO―つち！お待たせ～ アイシやつつけたよ～」

「…何！？」

「バツツ！お帰り～ ゴイツ、しぶとくでせ～…それより、相棒も連れてきたの？」

バツツが帰ってきて驚くスコールと対照的に嬉しげるWO―。バツツを見るとチヨゴボに乗っていた。

「ああ。ゴイツの名はボコー宜しくな～」

「くえええ～！」

ボコが「宜しく～」と言わんばかりに鳴ぐ。

「汚ねえ！そんなのありかよ？」

優勢から一気に不利なったスコールが異議を唱えるが…

「一応、インストール画面で出演してたからありだろ？…ふふふ。」

WO―が笑いながらボコの“存在”を肯定する。

「あははは。折角、連れてきたからボコに攻撃をさせてみよつぜ？…」

「それ良いな！カツコイイ！…！」

バツツが自慢の相棒に任せると提案するとWOLが瞳を輝かせながら言つ。

「今度はネギ坊かよ

ジタンが物陰から小声で突つ込んだ。

「くそー！」

絶体絶命のスコール。

「ボコ、やつちやえ～」

「くええええ～！」

バツツの掛け声と共にボコの凄まじい嘴による突きがスコールを襲う。

「ぐわああああ！」

スコールは倒れ、戦闘不能となつた。

「コレで6匹 ククク… 残りの奴らも片付けなきゃね？バツツ
「ああ…俺は「イツ」と一緒に先に逃げたネギ坊を探すよ～」

「くええ～！」

「うん、宜しくー！」

バツツはボコ共にオニオントナイトの行方を探る為にその場を去つた。
残されたWOLは…

「じゃあ私はジタンとセシルを探すね〜」

「

脱落者は6名。ピンチ。

イカ（前書き）

遂にチヨ「ゴボ召還」という裏技というかバグ技としか思えない攻撃までし出したバツツさん。

コスモス：「ある意味、WΟよりコイツの方が厄介なんじゃ…」

～キーワード～

- ・イカロス
- ・ストーカー絶対に駄目
- ・原点回帰

「ネギ坊……やつと追い詰めたぞ！」

オニオンナイトが走つてゐるといつの間にかバツツが追い付いていた。

「何で… チョコボに乗つてんのさ？」

「バカ野郎！ そこのチコボと一緒にすんな…！ ボコモジ立腹だぜ…！」

「くえええ～！」

オニオンナイトがボコヒキで指摘すると怒り出す一人と一匹。

「いまいち… 怒つてるか解らなによ…」

オニオンナイトが感想を漏らすと…

「解らなくて良いよ… 此処で終わるんだから。 あばよ ネギ坊。」

「柳沢慎吾…？ つわあああ…」

バツツによつて倒されるオニオンナイト。

「コレで7匹… あれ？ 6？ 1匹間違えた？ まあ良いや… WO～つちの所に戻るわ」

脱落者7名。 ちなみにジケクトは含まれてるが WO～とバツツに殺られてないので数え間違つてしまつバツツ… その頃、ジタン達は？

「こよいよ本格的にヤバくなってきたな… 何話か前まではあんなに

和やかに会話してたのに…」

「どうとう僕ら、一人になつたね。」

ジタン達はW.O.に見つからないように未だに物陰に隠れながら会話をしていた。

「なあ、俺達。あんな奴らに殺されるのかな？俺には帰る場所があるのに…」

「大丈夫だよ。それより…見て…あそこ…」

セシルの差した方向を見るとセフライロスが居た。

「あの人を囮に使おうよ？」

「…お前、身内には優しいが敵にはとことん容赦無いな。」

セシルの言葉に引くジタン。

「だつてあつちにはクソ兄貴がいるからさ？」

「…俺はつづくづく思つよ…お前が敵じゃなくて良かつたと…」

セシルはW.O.に見つからないようにセフライロスを呼ぶ。

「お～い、ストーカーさん。」

「誰がストーカーか！」

呼ばれたセフライロスは失礼だと言わんばかりに怒る。

「事実だろ？あんだけ、”クラウド”って呼んでたら…な？」

意見を求めるジタンにセシルも同意する。

「ねえ。…ストーカーが嫌なら墮ちた英雄“イカロス”…略して“イカ”でも良いよ?」

「せめて、本名に近い…“ロス”にしてくれないか?」「却下。このラストバトルの時にイカっぽかったから尚更、イカで!」

諦めたのかセフィロスが…

「ああ…もう何とでも呼べ。…それより何だ?」

「ええ…実は僕らW.O.に襲われてるんです。助けて下さい!」

即答で。

「ヤダ。何で私がお前らを助けねばならないのだ。」

「勿論、タダとは言いません!宜しければ…コレを。」

セシルは一枚の写真を取り出した。

「…?コレは!私の?」

「はい。落ちていたので返そうと思つたんですが…助けて貰えない
ようなので…」

写真を懐に戻しジタンの元に戻ろうとする…

「待て待て!解つた。協力をさせて頂こう!…じゃあ、行つてくる。」

「お気を付けて!」

セフィロスがW.O.の所に行つたのを確認して…

「何を見せたんだ? [写真?]」

ジタンがセシルに近付き先程のやり取りについて聞いた。

「ああ。 あの人の持ち物をコスモスから貰つたんだけど…要らないから本人に返した。」

「へえ? 何の写真なんだ?」

聞くと困ったような顔をするセシル。

「…あの人想い人かな? 取り敢えずアレのせいで僕は散々な目に遭つたからな…ついでにイカさん、散つてくれないかな?」

「…。」

ジタンはこれ以上聞かない事にした。

ヒテオ（前書き）

セフィロスはセシルに嵌められWΟLに立ち向かう…

→キーワード→

- ・英雄の価値
- ・贈り物
- ・セシルの真の怒りの元凶

「其処の青いの……英雄のこの私が“絶望”を贈つてやる!」

WO「に立つと宣言するセフィロス。

「ふん!…ならば私はクーリングオフにして…お前に“滅亡”を贈つてやる!…あつははは…」

WO「は堂々と返答した。

「返品期間大丈夫かな?」

二人のズレた会話を聞いてたセシルがジタンに尋ねる。

「そこが問題か?…お!…バトルが始まったぞ!…」

セフィロスとWO「のバトル開始。

「行くぞ。…斬る!」

「…はつ…」

「何!?」

WO「は盾でガードし、反撃した。

「あつははは…お前の攻撃は残像ばっかで全然当たらないな?早さだけでダメージが無いよ?…ウフフ。」

「くつ!…ならば、こうだ!」

セフィロスが上から自分の体ごと落ちてくる「獄門」という技を仕掛けたが…

「ダメ駄目 そんな技じゃ…避けちやうよ。」

「何…?…うわああ。」

技が強すぎた為か地面に穴が開き、そのまま落ちた…

「うわ～、だつせ～！そのまま埋めちゃおうかな」

「待つてくれ！…くわ、出られない。」

暫く何をするか考えてたW.O.が思い付いたよつこ

「う～ん、そ～だ！穴の中に石を投げつけちゃおう

セフィロスの居る穴の中に沢山の石を投げる。

「イタタタタ…。痛い痛い痛い！クソ～！～！」

セフィロスは穴の中で息絶えた。

「これでフ匹目。残りはどっちかな？…何処に隠れてる？出でちゃがれ！」

様子を見てたジタンとセシルは…

「今まで一番、弱かつたね？…英雄じゃなくて“ヒテオ”の間違いだつたのかな？」

「そうかも…あの人、多分頭の中がクラウド一色で出来てるんだろうな。レバが1しか無かったぞ…」

「何か…見かけ倒しだったね？あの剣捌きも…あれなら僕がW.O.」

に挑んだ方が良かつたな……」

セシルが立ち上がりつてWO-Lの方へ向かう。

「……行くのか？ だつたら俺も……」

「大丈夫。君は隠れてて……」

「でも！ バツツが戻つてくるかもしれない。アイツはチヨ「ゴボ乗つてるし……」

「心配してくれて有難う。でも平氣！ ピンチになつたら兄さんを喚ぶから。」

セシルに諭され黙つてたジタンだつたが……

「……解つた。隠れてるよ……でもその前に、 “呼ぶ” んじやなくて “喚ぶ” んだな？ 兄貴……」

「ああ、召還獣みたいな者だよ？ 鉄巨人に似てる……つていうか本人？」

「お前……そんなに嫌いか？ 兄貴。」

「別に嫌いじやないよ？ ただ……友人を2度も操つて僕を嵌めたり、騎士団を退団させられたり、恋人を攫つたり、王様を殺して替え玉用意してた事とか全然怒つてないから……」
(……。絶対根に持つてゐる。)

次回、セシルがWO-Lに挑む。

ルトオ（後書き）

実は4を未プレイだつたりしますが、プレイ済みの友達に読んで貰い、「合ってる」と言われるので内容は大丈夫だと思います。

キャラガイド見て調べて書きました。

マイク アップ（前書き）

弟組が生き残ってしまったコスモス側：鬼に立ち向かうべくセシルが動き出す。

（キーワード）

- ・血祭り（前夜祭）

マイク アップ

「じゃあ、もう行くね？もし、やられたらジタン…君だけでも逃げ切ってくれ。」

ジタンに背を向けながら言ひつセシル。

「…今更だけど、何か塊魂みたいに巻き込んでゴメン。」

「…気にしなくて良いよ。WOLとは戦つてみたかったし…何よりWOLの精神鍛錬が足りないからいけないんだよ？君のせいじゃない。」

厳しいセシルの意見に…

「……。セシルって…言ひにくいけど味方でも敵になると言葉に容赦ないな？」

「そう？もしそうだとしたら…色々経験したからだと思ひつ。」

少し沈黙し…

「……。そうか…。」

「…じゃあ、行くね？」

「…ああ、死ぬなよ！」

セシルがWOLの前に現れる。

「ほう、バツツが帰つてくるかもしないのに一人で挑むとは…」

「一人でも大丈夫だよ？君達と違つてね？」

（本当に容赦無い…）

様子を見ているジタンが心の中で突っ込む。

「何だとー。」の……絶対泣かしてやるー……。」とその前に……
「？」

「ちょっと待つて。……変へ身」

WOLは赤い甲冑…アナザー・フォームに着替えた。

「そろそろ汚れてきたからね…アナザーだと赤いから血も目立たないしね」

新しい服に着替えWOLは御満悦のようだ。

「血祭りなのに目立たなくて良いのかい？」
「うん だつて…血で汚れるのは…」

セシルを指差し…

「お前だ・か・ら！」
「……。遠慮します。」

顔色が悪くなり全力で否定するセシル。

「遠慮しなくて良いんだよ…あと欲を言えば暗黒騎士より血が目立つ白いパラディンの方が良いかな？」

（僕、パラディンの方が慣れてるけど…これだと暗黒騎士で戦わないといけないかも。）

「だ・か・ら 大人しく沈め！」

戦闘開始！

マイク アップ（後書き）

衣装が赤で初めはネギ坊が予定でしたが、…結局壊れ放しのWOLFに。

セシルは汚さず、あまり慣れてない暗黒騎士でWOLに勝てるのか？

～キーワード～

- ・ 赤
- ・ 量産型球体

「あつははは…こぞ参らん。」「来るな！」

セシルはWOLに向かって黒い球体を放つた。グラビティボール

「…くつ。邪魔臭い…」

黒い球体を空中で避けながらセシルに近付こうとする。

「君は接近しないと攻撃出来ないからね。空中なら尚更…地に足を着けたら魔法を使われるから悪いけど…」

「ムカつく！下に降ろせ！！」

「嫌だね。僕だって慣れてない姿で戦ってるんだ。これ位しないと僕が不利になってしまっただろ？」

WOL防止用の球体を何度も出すセシル。

「きく！邪魔！！」「今だ。えい！」

セシルは闇を走らす技を使いWOLは大ダメージを食らった。ダークフレイム

「ブレイブを貯めていたからね？それにしても…運が良いね？ラストリーブが発動したお陰で助かったね。」「うぬぬぬ～。」

WOLのHPが赤くなる。

(ょ～し、あと一撃。これなら勝てる…)

セシルは黒い球体を放った後、パラディンになり白い放射状の物体の攻撃をしようとした…が。

「…」の時を待っていた。「

WOLFが盾を放り投げた後光を放つた（ルーンセイバー）。

「何…？」「うわあ。」

「これで終わりだと思ったのか？甘い！」

WOLFはEXモードになりHPを回復しつつ追いついていく。

「行くぞ。あつははは～！」

（いつの間にEXバーを貯めてたんだ？それにこの強さ…タイプは逆境か！）

「じゃあ、そろそろ…決め技発動」

（ヤバイ。）

「お揃いね～、私達。これでお揃いね～、ああ幸せー。」

（サンホラ！しかもstar dustだと…）

Sound Horizonの怖い歌詞を歌い出すWOLF。

「技発動はもう止まらない」

（そろそろ兄さん喰っぽうかな？本当に…）

「血で赤くなってきたね？でも…何故…何故なの…何故死なないの…」

（…）

考えると不気味な笑みの「WOL」が…

「ウフフ…。無駄だよ。君のお兄ちゃんはバツツが片付けてるから。」

「何だつて！」

「ククク…喚ぶと思つたから手配しちゃつた…それじゃあバイバイ

バイ

「サーフィスーサンホリは…つわあああ。

「残るは一匹…さあどうする？」

ジタンが隠れている所を見つめながら呟く。

「ど、どうしよう…」

果たしてジタンの運命は…

stardust (後書き)

今回は技名を括弧にして書いてます。ただ最近してないので攻略本で調べながらなんでも不安です。

化け猫（前書き）

ジタンがピンチになる少し前…クジャが女装の為に気合いを入れていた。

～キーワード～

- ・年齢
- ・P.S
- ・汁と汗

化け猫

「かくかくしかじか…なんで！化粧道具を貸してよ？」

首を傾げながらお願いするクジヤ。

「何で私の所に来るのよ？暗闇の雪に備つれば良一じゃない？同類なんだし…」

対するアルティミシアは凄く嫌そうに答える。

「あの人気が持つてると思つてるのかい？だつて中身は女じゃないかもしけないんだよ？仮に女でも…もう皺苦茶の婆だよ？あつと…」

ウンウンと頷きながら想像する。

「そうかもしぬないけど…私みたいに顔や体中に模様があるから持つてんじやない？化粧道具…」

「多分、それ…化粧道具じやなくて絵の具だろー…もつ、ドモホルンリンクルに頼つてるからつて…恥ずかしがらなくてむ。」

「頼つてねえよー…時間を操れるから年齢くらい止れるわよー…」

クジヤの言葉に猛烈に怒る。

「じゃあ、何でそんなに老けてんの？もつと若くすれば？」

「一の外見（年齢）が気に入ってるからよー…老けてませんー…」

ハアハアと撒くし立てながら反論するアルティミシア。

「もう、年齢の事になるとすぐ、ヒステリックになる……」しかからオバサンは……」

「アンタ、私に喧嘩を売りに来たの？……そもそも、人に物を借りた

い時の態度が悪いから嫌なのよ……まあ他にもあるけど。」

「え？ 態度？ 普通でしょ？……というか他にも理由あるの？」

理由を聞いてみると……

「……生理的に嫌。アンタが使った後の使いたくない。何か“汁”が付いてそうで……」「……」

「せめて“汗”って言つてくんない？……分かったよ。ふう……」

黙り出したクジヤに……

「あら？ やつと諦めてくれた？」

嬉しそうに声掛け、やつと出て行かそつとする。だが、それより先にクジヤが何かを思い付いたようで口を開いてしまう。

「じゃあ、サンプル頂戴！ それなら良いでしょ？ オ・バ・サ・ンだから持つてるよね？」

「…………」

クジヤの言葉に声にならない声で怒りだすアルティミシアだった。

「待つててね～、ジタン」

こつして、クジヤはアルティミシアから化粧道具を貰い女装を始めた。

化け猫（後書き）

女装が完成しアルティミシアに見せに行って…

「僕は美しいから何でも似合つんだよ？例えば異性にも化けれるんだぞ」

「こつち来んな！ド変態！－」

アルティミシアが扉を勢いよく閉めたのは言つまでも無い。

問題発言（前書き）

ジタンの運命は…

～キーワード～

- ・教育
- ・ジタンがキレた

「はあはあ、くそ逃げても逃げても追つてくる！此処は東京砂漠か
！…！」

走りながら呟くジタン。後ろではWOOが追いかけてくる。

「諦める。何処へ逃げても同じ…私は何度もお前を追い詰めて追
い詰めて痛めつけてやる…」

凄いオーラを発しながらジタンを追い詰めていく。

「ひいっ、怖え～！…アンタ、俺に何か恨みでもあんのかよ…！」
「恨み？そんなモノは無い…ただ、私を侮辱した罪は重いぞ？…ク
クク。」

「あんんじやね～か！侮辱たって事実なんだから仕方無いだろ…！」

ジタンの言い分に納得出来ないという表情をして反論する。

「事実？そんな訳無かるう？私は皆から愛されるリーダーさ
「…。普段ならリーダーとして認めるけど…今は絶対認めねえ。
「ほ～う？認めないと…さては貴様リーダーの座を奪いにきたな
！渡さないぞ？」

剣をジタンに向けながら言つてみる。

「違うし…要らないから…！…だいたい、あの時はアンタが女の子
を苛めてたと思ったから止めに入つたんだよ。」

「苛めてない。」

「アレを苛めじゃなければ…何だ？」

ジタンの問いに暫く考え出した答えは…

「調教？」

「……。てめえ、本当に何やつてんだ？」

「間違えた。説教だつた…剣を使つて。」

「凶器を使つてる時点で説教は違うよな?この野郎!」

ジタンは足を止めてWΟ＼に向き直る。

「女の子を泣かしやがつて!許せん!…」

実際は泣いてないし、女であり無いクラウドを庇うジタン。

「何を怒つてるのだ?狩られる側なのに…」ヒたちが怒りたいわ!」

「つるせえ!バツツが来ようとしてめえだけは絶対倒す!土下座しあがれ!…」

「ふん!…望むなら相手をしよう!」

ジタンン▼WΟ＼のバトルに突入。果たして軍配は…

ジタン v sWOL (前書き)

どっちが勝つかな?

～キーワード～

- ・金八先生
- ・駄洒落

ジタン vs WOL

「本気出しやがれ！」

「やれるものならやつてみるが良い！」

ジタンとWOLのバトルがスタートした。

「まつ！」

「すばしっこい！…攻撃当たらない！」

ジタンはWOLの攻撃を避けつつ自身も攻撃する機会を窺つ。

「盗賊なめんなよ？攻撃に力は無くても早めはあるし何度もすれば蓄積する。」

「まつ！」

「うひひひひち…遅いよ…！」

WOLにダメージを与えるジタン。

「くつ…これなら…」

「何？今度はティナちゃんのセリフ？でも当たらないぜ。」

「むむむむ…だつたらコレで…！」

攻撃を避けきれず当たつてしまつ。

「イテ…やるじやん…じゃあ、これは避けられるかな…まつ！」

「なつ！光弾が飛んで…」

光弾を避けれないWΟーに対し着実にダメージを【えブレイブを溜めてたジタンはトドメを刺す。

「…そろそろかな？じゃ あなリーダー…飛んでけ…」
「うわああ！」

ジタンのHP攻撃が決まりWΟーに勝つた。

「どんなもんだい！さあ、あの娘に謝れ。」の野郎…
「嫌だよー！いーだー！…」

口の両端を手で引っ張り舌を出すWΟー。

「良い年こいた野郎がやる事じやねーよな？てめえ、いい加減にしねえと…」

その時、ガサガサと物音がし…バツツが帰ってきた。

「よつー！ジタン…WΟー」をよくも苛めてくれたな？
「嘘…！折角、追い詰めたのに…」

あと一息という所でバツツが戻ってきてジタンの顔に血の氣が去つていぐ。

「うわーん、苛められた！」
「よーし、ボコ。ボコボツ！」にしてやれ！
「くえええー！」

バツツの指示でジタンに向かつて攻撃をするボコ。

「イテ！くそ～！！」

「顔は止めときなーボディを狙えよ！ー！」

「金八先生！…ちっくしょ～！！」

「逃がすか！」

何とか逃げてみたものの、戦闘のせいか体力は尽き始めるジタン。
彼の運命は？

ジタン▼SWOL（後書き）

久し振りの更新です。申し訳無いです…

気付いた方も居るかと思いますが一話目（受難は〜）を繰り上げてアンケートの話を書きました。4分割を無理矢理纏めたので文章は変です。宜しければ読んでみて下さい。

カオス編は終わったら書きます。

ショック療法（前書き）

頑張れジタン。

～キーワード～

- ・ボコ還る
- ・誰か登場
- ・帰れ

ショック療法

「ケケケ！もう、逃げられないぞ？」

「あはあはー私を苛めやがって…」

バツツとWΟ「に追い詰められたジタン。

「その笑いは…あさきー？…ハアハア、くそー！」

バツツはボコに嘴攻撃の準備をさせ、WΟ「は剣を構えジタンの上に振り下ろそうとしている。

「じゃあな！」

「バイバイ！」

ボコの嘴がジタンに降りかかるうとした…その時。

「僕のジタンを苛めてるのは何処のどいつだい？」

「…？」

“誰か”がジタンの前に現れ二人は驚き攻撃を止めてしまつ。

「お前らだよー！」

その“誰か”が一喝するとボコが狼狽え始めた。

「くつ…くつ…くえええーー！」

ボコは“誰か”に恐れをなしたのかバツツを振り落として逃げてい

た。

「助かつた！…ふ、誰か知らないが有難…」

ジタンは助けてくれた“誰か”に御礼を言おうとするが固まつてしまつ。

「ふふふ。ジタン、見て！美しく生まれ変わった僕を…」

其処には女装した“誰か”が立つていた。

「…お前、クジヤ？何つも格好してんだ？喋り方は…にしおかすみこ…なのに、格好はエドはるみ？」

「君の中の人繫がりさ 可愛いだろ？」

同意を求めるクジヤに青筋を浮かべながら即答で…

「氣色悪い。つーかエドはるみじやなくてエドワード・エルリックだから！」

「え？違つのかい？」、「騙しあつて！」

「無双口調！そもそも、騙してねえよ！…何しに来たんだ？お前

…」

本当に疑問だつたので聞いてみた。すると…

「君にこの姿（女装）を見て貰つ為に会いに来たよー！ぐ
「よし！今すぐ帰れ！…一度と来んな！…！」

笑顔で毒舌を吐くジタン。

「…酷い。」

クジャは泣きそうな顔でジタンを見ると…

「確かに今のは酷いな？」

「ジタン、今のは酷いぞ？」

いつの間に正気に戻ったのかWOLとバツツがクジャと一緒に抗議する。

「そ、だ、そ、だ！ 僕に謝れ。」

「謝つてはど、だ？」

「取り敢えず、謝つとけ？ な？」

三人がジタンに謝れコールをし始めた。

「うるせえ！ つ、かアンタ、何、混じつてんの？ さっきまでアンタらのせいで色んな人がエライ目に遭つたんだぞ？ 寧ろ、お前らが謝れ！！」

謝れコールに異議を申し立てるジタン。WOLとバツツのせいで味方も敵も壊滅寸前まで追い込まれたのだから至極、当然である。だが…

「エライ目に遭つたんだぞ？ 寧ろ、お前らが謝れ！」

…とはクジャ。確かに先程来た彼は無関係であるが格好が格好なので謝るべきである。

「何の事だ？ 私はさつきから此処に居たではないか？」

青鬼状態を全く覚えてない全ての元凶… WO-は無関係と言わんばかりに抗議する。

「WO-が暴れたせいだろ？俺のせいじゃない。」

バツツは途中から混乱状態になつた為、ある意味被害者であると同時に加害者なので謝らないといけない。

三人の言い分にジタンは…

プチ！

…キレた。

「お前ら纏めて吹き飛べや！」

ブレイク技の竜巻を発生させる。

「どひやああ～！」

三人は悲鳴を上げながら風になり星になつた。

こうして、青鬼事件は無事解決。余談だがバツツとWO-はジタンに3日ほど口を利いてもらえなかつた。

ショック療法（後書き）

今回で第一「部終」です。

次回は番外編をして最終部に行こうと思います。

青鬼事件から3日後の話...

～キーワード～

- ・ツンデレ
- ・兄組

「おい、ジタン。『メンつてば！セシル達に何があつたか聞いたから…すまなかつた。この通り許してくれ！…」

バツツが手を併せてジタシこ謝る。

「…もう怒ってないよ。」ハルヒが「ermenな?物真似なんか無茶振
り頬んで…」

ジタンも流石に3日経つたのか機嫌が直っているようで、逆にバツツに謝つてきた。

「え？ 別に良いよ？ WOLの真似楽しかったし？」
「樂しいって… あんだけ酷い目に遭つたのに一言で済ませるなんて… 懐でかいなお前…」

バツツの言葉に驚くジタン。

「俺、退屈嫌いだから。人生は山あり谷ありだよー。」

多分、見習つてはいけないんだろうけど…

「そつかな?... ねえ、WO-やクジヤの事まだ怒つてゐ?」
「WO-は青鬼つて言つた俺も悪かつたからな... クジヤは...」
「クジヤは?」

問い合わせられたが、間が開き撒くし立てるようになってしまった。

「…女になれば俺が誰にでも声掛けたと思われてるのが腹立つ。」

（実際そんななんじや…）

「だいたい似合つてねえし、化粧ケバすぎ…ああ、思い出しただけでムカつく…！」

思い出したのか、頭をクシャクシャと搔くジタン。

「まあまあ。落ち着けって？思い出させて悪かったよ。」

バツツが宥めにジタンに駆け寄る。

「……よ。」

「？」

聞き取りにくかったので近付いてみると…

「…本当はもう怒つてないよ…全部。ただ会つなら…会いたいなら普通の格好で来れば良いじやん…」

「…うん、そ、だね。」

相槌を打ち、安心する。

「俺が怒つてるのは女装をした事…態度もでかかつたけど…いつも事だし…つて、何言わせてんだ！今の無し…！」

（シンデレ。）

ジタンは顔を真っ赤にして走り去つていぐ。そんな一人を物陰で見守る男達が居た。

「良かつたな？怒つてなくて…」

「ゴルベーザが傍らの人物に問うと…

「…べつ、別に。ジタンが寂しがつてないか見に来ただけだし…」

「…血は繋がつて無くても似てるな。流石兄弟。」

ウンウンと感心する。

「…どうかな？じゃあ用事済んだし帰ろつかな…」

帰ろうとするクジヤに…

「…私の用事が済んでない。」

「え？」

「あの一件（弟を女装させよつとした事）以来、口利いてくれないのだ。」の前も撤回しきつとしてたら、チヨコボ乗つた奴に邪魔されるし…」

しょんぼつとしながら面白あるゴルベーザ。

「…それはアンタが悪いだろ。普通、弟に女装させるかな…」

「女装したお前に言われたくないわ！…冗談のつもりだったのに…」

本当は女装させる気満々だったが。

「…ドンマイ。」

「…こういう事で付き合つてくれぬか？」

「嫌。」

即答。

「お前の弟、見に行くの付き合つてやつたろ?」

「頼んでないし。」

「……。」

泣き始めるゴルベーザ。

「なつ……泣くなよ。解つた……解つたから!協力するから!……」

「本當か?」

「うん。じゃあ、あそこにいる君の弟を連れて来るね?」

「え? ちよつ……待て!」

こうしてクジヤはゴルベーザの制止を振り切つてセシルを連れてきた。果たしてセシルから許しは貰えるのだろうか? ゴルベーザの運命は……

初めてのシンデレラ…あつともう書けないシンデレラ…だって、未だにシンデレラの意味を分かつてませんもの。」

シンデレラって何ぞ〜！

果たして仲直り出来るのか…

♪キーワード♪

・ガリ
・012
・兄弟

「で？何しに来たの？」

セシルは明らかに嫌そうな顔をし、ゴルベーザに対して文句を書いた。

「謝りに来たのに…何だ？その態度は！」

「謝りに来たんならこの位の事で怒んないでよ？馬鹿が…」

「や…貴様！」

怒るゴルベーザに溜め息を吐き…

「はあ…新作にはローザと出たかったな…寄りによつて勝手に僕に嫉妬した挙げ句、馬鹿に操られたガリが出演なんだよ！クラウドが羨ましいよ…」

ボヤくセシル。

「…ガリじゃなくてカインだろ？セシル。お前達親友だろ？」

「親友じゃないよ！ローザにまで手を出したんだよ？しかも…一度操られてたんだよ？本当、馬鹿だよね？」

遠回しにゴルベーザを責めるセシル。

「仕方無いだろ！私だつてゼロムスに操られてたんだ。こっちも被害者なんだぞ…！」

ゴルベーザの言葉に鼻で笑つ。

「自分で被害者って普通、言つかな？じゃあ、僕も被害者だよ。」
「……」

黙ってしまう。仲直りに来たはずが溝が深まるばかりで一向に進まない。

「はあ～…」

セシルは溜め息を吐き…

「結局、何しに来たの？」「
「だから、お前に謝りに…」
「もう、良じよ。帰る…」

セシルはゴルベーザの元から去っていく。

「待て！セシル！－！」

無視。

「コラ！待たないか！－！」

走って腕を掴む。

「！…離せよ！－！」

「話を聞かないか！セシ…ル？」

ゴルベーザは腕を掴んだ時にセシルの顔を見る。その顔は泣いていた。

「どうしたんだ？ セシル。」

「煩い！僕だつて、仲直りしたいよ。」

涙をボロボロ流しながら…

「でも、顔を含めせたりあひと女冠服だらひて思つてた。やひぱりそつだつた。」

セシル・

「だから、もう少しうまめに、お互いの為に…」

「ヤマハ」...」

ゴルベーザに背を向け再び去ろうとするセシルに…

「すまなかつた！私が悪かつた！！」

手を掴み此方に向けさせるゴルベーザ。

「ほんの... 懸ふだけだつたんだ。楽しめたからって思つて...」

- 6 -

卷之三

暫く黙つていたセシルも

「僕」こそ「ermenなさい。兄さんの方が一番の被害者なのに傷付く事を言つて…」

「メンなれ。メンなれ。メンなれ。

泣きながらペペと頭を下げるセシル。

「もひ、良い。顔を上げなさい。」

動きを止め顔を上げる。

「何て表情をしてるんだ。」

涙を拭い、頭を撫でるゴルベーザの動作は何処か懐かしかった。

「もう、子供じゃないよ。」

「…やつと笑顔になつたな。」

ぎこちないけど笑いかけてくれたセシルに嬉しくなるゴルベーザ。静かに諭すように話す。

「…私は人を殺めすぎた。その罪を忘れない為の“ゴルベーザ”だ。お前が気に病む事じやないし、お前の言つた事は操られたとしても“事実”だ。」「でも…」

「しかし、弟に心配をせると私は兄失格だな。」

撫でてた手を止め、歩くゴルベーザを今度はセシルが止める。

「待てよ…兄さん…！」

手を掴み…

「そりやあ、たつた一人の兄弟だよ？僕だって心配する。」

「…つ…」

「ゴルバー、ザは驚いて、嬉しそう」…

「（心配されるのも悪くないな…）有難う、セシル。」「どういたしまして。でも、もつ一度と女装なんて馬鹿な事を言わないでね？」

小指を差し出し約束を交わした兄弟は無事仲直り出来た。

自分で自分の首を絞めました。今回、せっかく新作出たのだから「新しく書き起し」ひとつと思つたのが間違いだった…しかも話が微妙だし！

期待してた方がいらっしゃつたらスマミセンドしたー！

酒は飲んでも呑まれるな（前書き）

青鬼事件から3日後の夜。

～キーワード～

- ・酔うと色々ある
- ・ギャップ
- ・苦労人セシル

酒は飲んでも呑まれるな

「今日は日頃頑張つてる貴方達に御褒美を持ってきました」

「コスモスが持つてた袋からは沢山のお酒が入つてた。ワイン、ブランデー、酎ハイなど種類は様々ある。

「メンバーは、俺とセシルとフリオとＷＯＬとバツツか…」

クラウドが集まつたメンバーの顔を見回す。

「他のチビ共は？」

「未成年なので置いてきました。お酒は20歳から…」

「バツツが聞くとコスモスは酒があるせいかテンション高めに応えた。

「コスモスは皆で飲もうと言つたのだが…未成年の飲酒は体に良くないから私が止めた。」

（流石リーダー。）

ＷＯＬの律儀な意見にセシルは関心した。

そして…

「それでは諸君乾杯！」

「コスモスが号令を掛けると…

「乾杯！」

皆で祝杯を上げた。

「…………。しかし、此処で酒が飲めるとは思わなかつた。」

「本當だね。たまには良いかもね……」

クラウドとセシルが飲みながら会話してると……

「うう……おええ～！」

フリオーナーが思いつ切り吐いた。

（うわあ……下戸ーー）

セシルがフリオーナーを見て内心ツッコむ。

「うういう奴居るよな？断れば良いのに……」

「フリオ、無理して飲まなくとも……」

クラウドがフリオーナーを指差しながら言つ。セシルはそんなフリオーナーの背中をさすつてあげた。

「……折角呼ばれたんだ……ちゃんと……飲まないと……うふー……」

「ああ、無理しないで……」

更に吐き続けるフリオーナーにセシルは酒を取り上げた。その時……

「ちょっと、フリオ！私の酒が飲めないっての？」

（酔っ払いが来た！）

良い感じに酔つ払つたコスモスが乱入してきた。手には酒瓶を持つておりフリオニールに向かつて…

「も～、ほり飲ませてやるわよ～。」

酒瓶をフリオニールの口に押し込もうとするコスモスを慌ててセシルが止める。

「コスモス、それ以上は…クラウド頼むから手伝つて…」

クラウドを探すが何処にも居らず、其処に居たバツツに尋ねる。

「クラウドなら寝のからつて先に帰つたぞ。」

（逃げやがつた！）

セシルは心の中で泣いた。

「可哀想になフリオ…弱いなら事前にウコン飲んどけよ。」

「あれ？バツツ…君は酔つてないの？」

全く酔つた様子の無いバツツを見てセシルは驚く。

「こんな物で酔えるかつ～の。バー・ボンとか持つて来いよな…」

（…酒豪だ！）

バー・ボン…物凄くアルコール度数の高い酒。それを持って来いと言う。

（凄いなバツツ…）

「うつ…う～。」

(泣き上戸になつた…)

吐きすぎたのか今度は泣き始めたフリオ「一郎にバツツはコスモスに向かつて文句を言い始める。

「嗚呼、泣き出したよ。おい！」コスモス飲ませすぎじゃないのか？」

「そ～んにや事にや～ですよ～。」

「あら～～すつかり出来上がつちやつて…」

酔いすぎて呂律が多少回らなくなつたコスモスを見てセシルは素直に意見を述べる。

「…いい加減にしろよ！フリオが可哀想じやないか…！」

「りやつて、私のお酒をによめないのが悪いも～ん。」

「飲めない奴は飲めないの…解れよ…！」

二人の会話を聞いてセシルは思つた。

（…ああ、分かつた。バツツは酒豪じやない…酔つてるんだ…アレで。）

「フリオの分も俺が飲むからくれ。」

（バツツつ…酔つと意見がマトモになるな～。）

普段は見ないギャップを肴にしてチビチビと酒を飲むセシル。すると…

「うう…酷い。フリオの分のお酒まで…W.O.」、バツツに何とか言つてよ…」

自分が楽しくないのか泣き始めるコスモスはW.O.に助けを求めるが…それがいけなかつた。何故なら…

「ウフフ…バツツめ」の泥棒が「
（……。『デジャブ』が。）

ほろ酔いだったセシルも「」の態度に一気に酔いが醒める。

「…「ん？お前、口スモスを泣かせたなー。許さんぞ」

暴れ始める「」にセシルは本気で悩んでいた。

（ああああ。ヤバイ、僕もクラウドみたいに逃げるべきだらつか？
それとも止めるべきだらつか？ああ…）

「酒の席はW.O」…青鬼が暴れてしまい結局はセシル以外も皆、酔いが醒めてしまう。そして、もう一度と酒は振る舞われる事はなかつた…。

「馬鹿だな…適当に逃げとけよ。」

後日談をセシルから聞いたクラウドは笑いながらそんな事を言つていた。

酒は飲んでも呑まれるな（後書き）

これ書いた後に気付いたんですが… フリオは19歳なんですね。 20歳かと思ってた… 一つ事で無理矢理20歳と言つ事で！

酒を飲む際は気持ち良くマナーを守つて飲みましょう。 この話のように迷惑を掛けないよう気を付けて下さい。

あと未成年は飲んじゃ駄目ですよ？ マジでー！ 酔っキツイから…

短いです。そしてネタが超古いです。

～キーワード～

- ・人形
- 無茶振りは止めましょう

コスモス組の成人達が杯を交わしたという情報を聞いたカオスは対抗して忘年会を開いた…。

「…という訳で諸君、の口頭の働きに感謝し、今日は隠し芸大会を開こうと思う！」

（感謝されてね～！寧ろ、罰ゲームだ…）

カオス以外の全員が青筋を浮かべながら思つた。

「では、芸を披露する者は前へ…」

カオスが促すと…

「はい。」

「はい。暗闇の雲さん、前へ…」

暗闇の雲が手を挙げ芸を披露しようと準備をする。

「ア、勇氣あるな～。」

「え～。#ナツ て何すんのかしら？」

クジャとアルティミシアが小声で話していると暗闇の雲の芸が始まる。

「一番…暗闇の雲、行きます！ペペシトマペシト。」

（触手に人形被せやがった！）

カオス以外の全員が心の中でツッコむ。

「牛君、餌だよ。」

「わい、肉骨粉バーラ味」

暗闇の雲の触手AとBが喋り（といふかロパクをし）芸はあつという間に終了した。

「どうも有難う御座いました。」

暗闇の雲が一礼をすると、酒も入り良い気分のカオスか……

「なかなか面白かつたぞ！流石だな！！」

親指を上にして「グ」 と褒めていた。

「勿体無き言葉を有難う御座います。」

カオスと暗闇の雲が話してゐる間、全員は思つた。

（何処が？そして、ネタ古っ！）

その後、宴會は朝まで続きカオス組（暗闇の雲以外）はウンザリした。

特別企画・忘年会（後書き）

次回から最終章に突入致します。今年いっぱい本編の方を終了させようと思いますので、もう暫くお付き合い下さい！

ケアル（前書き）

青鬼事件が解決した直後の事...

～キーワード～

・暇
・瀕死
・（ 、 、 、 ）ショボンヌ

ケアル

「暇だな～。」

ティナはコスモスに安全な場所に連れて来られたのだが、誰も居ないで凄く暇だった。

「誰か来ないかな？隠れてる…って言ひつけど、別に何も起こらないじゃない…」

ティナが一人でブツブツ言つてる時だった。

「そこのお嬢さん。私にケアルを掛けてくれぬか？」

「え？ きやあああ！」

其処に居たのはボロボロの鎧で今にも死にそうなガーランドだった。ティナは余りの恐ろしさで素早く後退った。

「ちょっと…逃げないで！」

「血だらけの鎧のお化けが出れば誰でも逃げたくなるわよ！」

「お化けじゃない…お前の所のリーダーにやられたんだよ…！」

必死に訴えるガーランドにティナはコスモス側のリーダーが出てきたので聞き返す。

「え？ WOLが…敵だから攻撃したんじゃないの？」

「敵とか以前の問題で斬りかかってきたがな！」

「でも、貴方だっていつもWOLに斬り合いしてほしうって思つてゐるじゃない？ 念願が叶つて良かつたじゃない。」

いつも一人の様子を見てたティナが言つと…

「良くね～よ！儂が望むのは“公平な”斬り合いであつて、“一方的に斬られる”のは望んでない！！」

「まあ！自分はいつも一方的にＷＯＬに斬りかかってる癖に…返り討ちに遭つたからって私に当たんないでよ？」

眉間にシワを寄せ不機嫌丸出しのティナ。

「仕方無いだろ？同伴者（皇帝）を探してたら居ないし… 我が宿敵本人に言おうにも回復してないから死ぬかもしないだろ？また斬りかかられたら間違ひ無く死ぬ。で、辺りを見回してたらお主が居たので声を掛けたんだ。」

長い説明を一気にしたガーランドは息を整えている。ティナは未だ不機嫌丸出しで当然の疑問を投げた。

「何で私なのよ！それに回復くらい自分ですれば良いじゃない…！」
「…儂のケアルだけじゃ足りなかつた、もうストックが無い…」

しょぼ～んとするガーランド。彼は此処まで来る間にある程度の回復をしたが全快には程遠かつた。

「……。解つたわよ！はい。ケアル…回復したから…とつと何処かに行つてね。」

「忝ない。礼を言つ…有難う。では失礼する。」

ガーランドは回復してもうつと急いで何処かに消えていた。

「全く！」

そんな一人を見ていた怪しい陰が此方に近付いている事をティナはまだ知らない。

誘拐（前書き）

近付いてくる足音…その正体は？

「キーワード」

・ゲスト2

ただし扱いが酷い

「やあ！僕ちんが君を迎えて来たよー」

表れたのはピエロの格好をした男だった。

「ケフカ！何しに来たの？迎えて来たってどういう事？」

意外な人物に驚くティナ。

「君を我が軍に連れ戻す為に来たんだ。僕と一緒に全部破壊しませんか？」

いつもの調子で聞き、また断られるだろ？と思つたが…

「…普段なら断るけど、良いよ…」

「え？マジで？誘といて何だけど…もつと拒もうよ？」

いつもと違ひ誘いに乗ってくれたのでやや戸惑つケフカ。

「暇なのよ。暇で暇で…暇潰しをどうしようか考へてた所よーまあ奇抜な格好のアンタには解らないでしょ？」

「お前どんだけ暇と抜かすか！破壊活動を暇潰しつて実は危険人物？」

「誘つたの…アンタだろ。危険人物つてどういう意味よ？」

危険人物と言われ不機嫌になるティナに少し圧されるケフカ。

「そりゃあそーですが…危険人物は言葉の通りでしょ？」

「あのね～？誰が破壊活動をするって言つた？」

「違うの？」

「私はアンタがカオス側に連れて行くつて言つから仕方無くお誘いに乗つた訳！」

理由を説明するティナに対しケフカは完全に引いてしまつ。

「もう、暇で暇でモーグリをフカフカにしきて破裂しそうだつたのよね…」

ティナの手元を見ると其処にはパンパンに膨れ上がり今にも破裂しそうなモーグリが居た。

「モーグリに対して破壊活動をするな…あ、それ以上は止めたげて…！中身出ちゃう…！」

未だに膨れ続けるモーグリ…

「苦つ…苦ボ！」

「なつ、鳴き声が…苦しそう…」

「早くしてよね？でなことモーグリ破裂しちゃうじやない？」

「解りました！さつさと参りましょう…！」

これ以上モーグリに被害が出ては可哀想だと判断したケフカは急いでティナを攫おう、もとい連れて行こうとする。

「…じやあ行つてくるわね？多分、夕方には戻るから。
(攫われてるのに態度でかいな。)

「何か言つた？」

「いえ！何も。では、参りましょう…！」

こうしてティナは（便宜上）攫われた。

誘拐（後書き）

ティナの趣味はモーグリをフカフカにする事です（攻略本参照）。絶対意味違うけどね。

暇だからと書いて動物にあたるのは止めましょう。

モーグリ語（前書き）

ティナが攫われた。

→キーワード

・モーグリが可哀想

モーグリ語

「ティナ！ティナ！！何処に居るの？」

コスモスがティナを探してると…

「ティナ！もう安全になつたから出てきて良いのよ？…あら？」

「苦つ…苦ボ。」

「まあ！大変！！暇だらうと思つて与えたモーグリが、エライ事に

！！！」

コスモスはモーグリを元に戻してあげた。

「クボ！」

「うん、ゴメン。ティナがモーグリ好きつて言つから貴方と一緒にしたんだけど… あそこまでやるとは思わなかつた…」

珍しくしゅんとなるコスモスにモーグリはフルフルと首を横に振つた。

「…クボ。」

「許してくれるので？有難う。ところで貴方、ティナは？」

ティナの行方を聞かれたモーグリは短い手足を動かし頑張つて伝える。

「クッ…クボ！」

「え？変な格好したオッサンに攫われた？」

「クボ。」

首を縦に振り同意するモーグリに対し…

「うんうん、貴方が人質にされたので仕方無く付いて行つたって訳ね…何て卑劣な！人質を取らないと攫えないなんて…！」

勝手に解釈し憤るコスモス。しかしモーグリはボソッと言つよつて…

「クツ…クポクポ！」

「え？アンタも人の事言えないですって？…どういう意味よ…宣しければさつきの倍、膨らませてあげましょうか？」

「クツ！クポ！…！」

物凄い勢いで首を横に振るモーグリ。

「嘘です。違います。人違いでした…解れば良いのよ。でも、どうしよ私の軍は青鬼のせいであつ疲れてるし…」

「クツ…クポ…。」

「別に、貴方のせいじゃないわ。落ち込まなくて良いのよ…あ、そりだ！」

コスモスが何かを企んだ。機械片手に話してゐる。この会話は次回明らかに…余談だがモーグリの真の言葉。

「自分から付いて行つたんだって！何、面白おかしく自己解釈してんの？悪口だけには勘が良いし…もう知らん。」

モーグリ語（後書き）

きっとコスモスはモーグリ語を理解してません。

次回いよいよ久し振りに主人公登場！

救出要請（前書き）

コスモスが取り出したのは携帯電話だった。まずGPSで場所を確認し、ある人物に電話を掛ける。

（キーワード）

- ・奇抜
- ・携帯とGPS
- ・職権乱用再び

救出要請

携帯を掛けるコスモス。携帯から“プルル”と繋ぐ音が聞こえ、途切れた同時に相手が出た。

「はい、もしもし?」

「もしもし?クラウド?アンタ、敵の地域で何してんの?」

掛けた相手はクラウドだった。

「その声は?コスモス!何で俺の番号知つてんの?しかも、PHSの俺より機能が良い携帯使つてるし…」

「ウフフ…貴方の事ならお見通しよ!“神”ですもの…!」

コスモスは得意の“神”の力でクラウドの番号を探知していた。

「それに神に相応しいのは機能豊富な最新モデルに限るわ~」

上機嫌で笑うコスモスに対しクラウドは冷めた声で…

「…用件は何だ?自慢話だけなら切るぞ。」

電源ボタンを押そつとする。

「待ちなさいよ~実はティナが攫われたのよ。」

「何だと~いつ?」

「つい、さつき…そこで貴方にティナ救出を要請するわ。」

いつになく真剣な声で話すコスモスに…

「…解つた。出来る限りしてみるよ。」

要請を引き受けた。

「有難う、クラウド！」

「でも、何で俺に？ティナって俺を嫌つてるんだよな？大丈夫か？」

心配するクラウドをよそにコスモスが明るい声で…

「ああ、その事？大丈夫大丈夫！私がクラウドは貴女を笑かす為にやつたって伝えたから…！」

「お前、本当誤解を招く発言を…」

呆れてると、コスモスがふふふと笑い出す。

「冗談よ。でも、笑かす為つて言つのは本当でティナも勘違いしてるんだけど…」

「ふうん、まあ怒つてないなら良いさ…ところでティナは誰に攫われたんだ？」

攫つた人間の特徴を少しでも聞いておきたかったクラウドだが…

「え？と、モーグリの話だと奇抜な格好した輩つて…」

「超アバウト！奇抜なファションの奴つて俺が知る限り4人は居るぞ…」

「知らないわよ！だつて、モーグリがそう言つんだもの。兎に角、さつさとティナ救出してよね？頼んだわよ…！」

「ブチ！」

ツー・ツー・ツーと一方的に切られた通話。

「くそ！…地道に探すしかないか…」

PHSをしまいクラウドはカオス城を目指す。こうしてティナの救出作戦はスタートした。

救出要請（後書き）

ちなみに奇抜な格好の輩はケフカ、皇帝、暗闇の雲、クジヤが該当します。

鎧3人は奇抜とは言い難いしアルティミシアヒジェクトはこの4人に比べたらまだ良い方です。

ストーカー…ごほ！間違えた。イカ？いや違う…さわら？まあ何でも良いか…セフィロスはアナザーが変態だけど、同じ変態のクジヤに比べたらまだ地味かなど。

第一村人（敵）発見（前書き）

救出活動開始。

～キーワード～

この話は“それから”より3日前の話です

第一村人（敵）発見

カオス城に着いたクラウド。しかし城は広すぎて迷っていた。

「適当に捜すしか方法無いな。」

風漬しで捜していると…前方から黒い鎧が表れた。

「貴様は？ 我が弟の仲を引き裂いた輩！」

「はあ～？ 何言つてんだ…」

「惚けるなー 貴様のせいで私はコスモスに騙され、弟は…」

泣きながら話す黒い鎧…「ルルベーザ。

「な、泣くなよー！俺が何したって？ アンタとあまり接点無いのに…」

言われたクラウドは取り敢えず何かしてないか振り返つてみる。

「お前の女装のせいで弟がグレた。私はただ妹を見たかっただけなのに…」

「それ確実にアンタのせいだろ？ だいたいコレは趣味じゃないし…」

「7の時はティファ救出の為にしたんだ。勘違いするな。」

冷たく言つと…

「ならば… 何故今も女装をしている？ 趣味と言わずに何と申せと？…

「…」もつともな指摘をされたが正直クラウドも…

「…解らない。コスモスにやられた。」

混乱した。今更だがクラウドは未だに女装中である。

「コスモスに？あのクソ女神！何処まで人をおひょくれば気が済むのだ！お陰でこっちは弟と口利けないのに…」

全ての元凶に憤るゴルベーザ。まあ、彼も贊同した時点で加害者のだが。そんなゴルベーザを見てクラウドは…

「…なあ。アンタ、セシルと仲直りしたいんだよな？だったら、謝れば？」

仲直りの提案をする。

「そんな事…出来ればとっくにしてる。でも、一度怒った弟は怖いんだぞ？よく言うだろ…優しい人ほど怒ると怖いって？」

ゴルベーザはブルブルと震えながら想像する。

「確かにやうだけど…セシルは、アンタの弟はつやんと謝れば許してくれるよ…」

食い下がらず再度提案する。

「…果たして、やうだろ？今回まにまより怒りが激しいんだ。」

「…じゃあ、3日くらい待てば、もしかすると気が落ち着いてるかもしれないぞ？」

「ゴルベーザは少し考えて…

「…うむ。 そうするか…」

と、納得した。

「何がすまないな勘違いとは言え怒鳴つてしまい、しかも相談にも乗つてもらつたし…」

「良いよ。アンタの事はセシルから聞いている…立派な兄だとな?」

セシルがゴルベーザの事を誉めていたと聞き、嬉しさのあまり泣きながら…

「お兄ちやん感激!」

ぶわ~っと涙を流しながら感動するゴルベーザに対し、クラウドは冷たく言い放つ。

「前言撤回…。空氣の読めないバカ兄貴だな? アンタ…」

そして暫く、ゴルベーザの弟バカに付き合はされるクラウドであった。

困った時は駄目だね（前書き）

クラウド、ゴルベーザにセシルの話を30分られる。

～キーワード～

- ・勘違い
- ・黒ゴル

困った時は喚んでね

弟の自述話もみづやく終わり、半ばウンザリしていたクラウドが本來の目的であるティーナの事について聞いてみた。

「そ～いえば、アンタの軍の誰かがティーナを攫つたんだ？ 心当たりは無いか？」

「ふむ。私も今帰ってきた所でな……」

「ゴルベーザは顎に手を当てながら考える。

「チヨコボに乗った輩に襲われていて見てないのだ。」

「そうか……有難う。じゃあ……」

立ち去りつつとするクラウドをゴルベーザは慌てて引き止めた。

「待ちなさい。思い出した……確かにクスデスがティーナの記憶を無に還して、我々の軍に入れるみたいな事を言つてたよくな……」

「マジかよ……早く捜さないと……」

「焦る気持ちは解るが何分、この城は広い。私もティーナを捜そう。」

「ゴルベーザの申し出にクラウドは喜んだ。

「有難うー、ゴルベーザさんー！」

「礼を言つな……困った時はお互に様だろ？ それと窮地に陥つた時は“ゴル兄”さんと喚んでくれ。駆けつけるから。」

背を向け反対側を捜す為に歩いていく。

「…ではティナを見つけたら君に報せよう。健闘を祈る。」「おう。何から何まで有難うなー!ゴル兄さんー!」

クラウドはティナを攫つたであろう相手…エクスデスを探す。するとズシンとゆっくり歩く鎧が居た。

「この野郎!ティナを何処にやつた!…」

「うん?…ぐえ!貴様いきなり何を?」

いきなり殴られそうになつたエクスデスは寸での所で避けた。

「惚けるなー!アンタがティナを攫つた事は知ってるんだ!..」

「何を言つている?私は攫つてないぞ。他の奴だろ?」

「まだ言い訳を!…こうなつたら…ティナの居場所を吐くまで殴つてやる!…」

「ぐええ!」

エクスデスはお得意の瞬間移動で攻撃をかわしつつ逃げていた。

「くそー!アイツめ…歩くの遅い癖に逃げ足は早いな。…待てよ。無に還すつて事は…ジタンやティナのあの記憶(女装)も消して貰えるつて事だよな…」

クラウドは閃いて、再びエクスデスを探す事にした。余談だがゴルベーザが何故エクスデスが攫つたと言つたのかは…

「多分、攫つたのはケフカだろうが…エクスデスは一度弟との会話を邪魔されたから始末してもらつた…」

自身の鎧の如く真つ黒な理由だった。

困った時は喚んでね（後書き）

ちなみに邪魔された場面ですが、本編のセシルの話の冒頭です。実際はセシルが怒るべきなんだろうけど、ネタが被りそうなので逆にしてみました。

他人の不幸は…（前書き）

自分の記憶の為、必死でエクスティスを探すクラウドさん。

～キーワード～

しつこいですがクラウドは絶賛女装中です

他人の不幸は…

必死に行方を眩ましたエクステスだが、とうとう見つかってしまった。

「うわ…見つかってしまった…どうしよう…あわわ。」

慌てまくるエクステスに…

「先ほどは取り乱してしまい申し訳ありませんでした。」

さつきとは裏腹に大人しい態度になるクラウド。

（え？ 何、 この人… 急にしおらしくなっちゃったよ？）

エクステスは心中で引きながらも何故大人しいのか気になつたので話を聞いてみる。

「実は貴方にお願いしたい事があり、 探しておりました。」

「一応… 聞こうか。」

「ある殿方が私をしつこく追い回すのと… ある友人が私の秘密を見つまつたので…」

シクシクと泣き（真似をし）ながら語る。

「娘よ… 何が望みだ？」

「はい。二人の記憶… 一部を消して下さい。」

暫くの沈黙の後…

「…「うん。無理！」

「はあ～？アンタ無に還すの得意だろ？何とかしろよー。」

大人しくなる前の態度に戻ったクラウドを見てエクスデスは驚く。

「豹変した！バカ言つな…私は存在を消すのが得意なのだ。記憶など小さいモノなど無理に決まっておろう！！」

「何だよ。役に立たねえな！あんだけ“無”を強調すりや出来ると思うだろ。だから俺達に技の練習台にされるんだよ？」

どんどん態度がデカくなるクラウド…

「されてないわ！何なのだ…！貴様…さつきか…」

傍若無人さに腹を立て始めるエクスデス。

「出来ねえなら仕方無い。丁度良いや。此処で技磨きでもするかな

」

ふつ切れた笑顔で失礼なセリフを言うクラウド…

「ふん…生意氣な…我が片腕になるが良…」…

勝負を受けた。だが、この勝負…クラウドがひたすらエクスデスを殴る蹴るをし圧勝する。そしてクラウドは知らなかつた。ジタンもティナもクラウドの女装など忘れてたり、ど～でも良くなつてたりするなど…

「あれ？俺、結局何してコスモスに呼ばれたんだっけ？まあ良いか

！」

ジタンは青鬼の強烈なインパクトのせいですっかり忘れていた。一方のティナは…

「暇だな…ケフカ！アンタつてドレス着れるのよね？女装してみてよ？」

「え？何言つてんの？お前…」

「はあ？誘つたからには暇つぶしの相手くらいしうやボケが！」

服を脱がし始めるティナにケフカは抵抗する。

「いやー…ちよつ…誰か助けて…あ～れ～。」

暇すぎてドレス装備が可能なケフカを相手に女装をさせていた。

他人の不幸は…（後書き）

攻略本見てたらアの某イベントの影響でドレスが装備出来るクラウドは兎も角、何故お前まで着れるんだケフカ？マジで。

ゴル まじ（前書き）

エクステスをボコり終えたクラウド。此処でまたある考えが閃いた。

～キーワード～

- ・ 困った時は唱えて下さい
- ・ 雲

ゴル まじ

「そ、いや、カオス軍にはもう一人…“無”が得意な奴居たつけ？ソイツを訪ねてみるか？」

クラウドが歩いて探しているところ…

「おー居た居た。うーん、どうやって声掛けよ？そ、だ！」

クラウドはその人物に走つて声を掛ける。

「スミマセン…そこの人。」

「うん？お前は？」

クラウドが向かつた人物は…暗闇の雲だった。

「助けて下さい！私、道に迷つてしまつて…そしたらあの水色の鎧の人がいきなりナンパをしてきたんです。」

「何じゃと？お前、大丈夫か？」

心配する暗闇の雲に…

「怪我は無いです。鎧の人も諦めてくれたみたいで…ああ。」

嘆泣きをしながら暗闇の雲に近寄るクラウド。ブルブルと震えている彼を心配しヨシヨシと頭を撫でる。

「どうした？怖かったのか？…よしよし、可哀相に記憶を消してやるわ。」

その言葉にクラウドは心の中でニヤリと笑つた。

「いえ。私の記憶は消さないで下さい。こういう経験をしておかないと次にまた同じ目に遭つた時に精神ダメージが大きいでしょう？」

「うむ。一理ある。」

暗闇の雲がクラウドの意見に頷く。

「私、前にも殿方に追つかれられて……他にも友人が私の悲しい秘密を知つてしまつたのです。」

「して…その二の方の記憶を消せと？」

「話が早いな」と内心ニヤけながらも外面には全く出でず、話すクラウド。

「はい。殿方は私など忘れて他の方に恋して欲しいですしそうして友人は
トラウマになりかねないモノを見てしまったので…」

ふむ

暗闇の雲は何か考え込む。あと一押しだと一気に頬み込む。

「ですから、お願ひします。一人の記憶を消して下さい！」

頭を下げる。暫くの沈黙の後、

「断る。」

「どうしてですか？」

此処まで演技して焦る。

「何故つて……お前が得体の知れぬ者だからだ。」

「そんな！私は……」

「……お前、本当は「スモス軍の者であろう？白状するがいい。」

筒抜けだった。再びの沈黙。

「ふ……」

「どうした？」

「……ふふ。あははは……」

「何が、おかしい？」

急に笑い出すクラウドに暗闇の雲は少し苛立つ。

「ふふ……ああ、スッキリした……」

ひとしきり笑い、涙を拭った後……

「……何だよ。バレてたのか……必死に演技したのにな。」

もう包み隠さず本性を表したクラウド。

「私が記憶消す……と言った時に一瞬喜んでおったからな。気付いて無いと思うが……」

「ちつ！ヤツパリ！コスモス軍だから駄目？」

「ああ……敵だからな。」

キッパリと拒否される意見。

「……同じ“雲”同士仲良くしまじょうよ？」

「一緒にするな。まあ我が配下になると何のあれば考えなくもない…」

「断る。他の手段を探すとしよう。」

クラウドも自分から提案しどきながら一緒にすると憚り、何より暗闇の雲の配下に成り下がるのが嫌だつた。

「簡単に逃がすと思うか?」

「くつ…」
「…なつたら…」

「?」

「ゴル兄さん、助けて下せ…」

すると…

「喚んだ?」

アレクサンダーよりじくの如く、ゴルベーザが一人の間に表れた。

「本当に来た!俺、急いでるので…あの方の御相手をお願い出来ます?」

暗闇の雲を見ながら…

「うむ…」苦労!解つた。行くが良い。

「有難うなーゴル兄さんー!」

颯爽と去つていいくクラウド。それを呆然と見送りはつと我に返つた頃にはクラウドの姿は消えていた。

「…貴様、敵を逃がすとは…無に還してやれ!」

暗闇の雲との戦闘を、ゴルベーザに任せクラウドは次なる目的地へ…

魔女先生（前書き）

「ゴルベーザに助けてもらい、暗闇の雲との戦闘を避けられたクラウド。また彼はある事を企む...」

（キーワード）

- ・イデアじゃない
- ・占い師？

魔女先生

「もへ、記憶を無くす奴が居ないな…俺はどーすれば…」

一生懸命考え…

「待てよ。無くさなくとも無かつた事にすれば…よーし…」

彼はある人物を探す。すると…

「あつた!魔女の部屋か…さつき2回とも演技失敗したし…堂々と条件を言つか…ぶっちゃけ恥ずかしいし…」

クラウドはドアをノックする。

「はい? どなた?」

扉の向こうから魔女…アルティニアの声が聞こえる。

「ど~も、コスモスにお世話になつてゐるクラウドと申します。お願

いが…」

「断る。」

間髪入れずに即答する。

「ちよつ…まだ条件言つてない…」

慌てるクラウドを余所にアルティニアは冷たく…

「ど～せ口クな事じやないでしょ？苦い経験をしたから…その人物の記憶を無かつた事にしてくれと…違う？」

ズバツと言ひ当てる。

「あ、当たつてるー何故解つた。」

「ウチの軍にもたまに居るから…何でもソイツは弟の記憶つて言つてたかしら？」

（ゴル兄さん！何て余計な事を…）

アルティミシアが言い当てたのは前例が居たからであつた。クラウドが内心落ち込みながらもアルティミシアは続ける。

「でも、無駄なのよね～。仮に封じても何かの拍子で甦るし…多分そのままにしておいた方が良いわよ？後からの方が精神ダメージ大きいし…」

「そ…そうですね。」

前回クラウドが口にした台詞を言われてしまつ。

「…私の予想だけど…時間が結構経つてるのであれば…その人達、忘れてんじやない？」

適当に言つてゐるが、実は正解だつたりする。

「…かな？忘れてると良いんですけど…」

「案外、大きな物事に出くわすと忘れるモノよ？もう、ど～でも良くなつてたりして…」

大きな物事とはWOLFの青鬼事件の事だ。しかし、クラウドもアル

ティニミシアもその場に居なかつたので知らないはず……流石、時間を操る魔女。恐るべし！

「……解りました。諦めます。……では。」

扉から離れようとするクラウド「……

「待つて。アンタ、ティナを探してんでしょう？」

「え？ 何で知つてんですか？」

「ああ、アンタの前の依頼者が話してくれたから……もし、見つけたら教えてくれって。」

あっけらかんと話すアルティニミシアにクラウドは別の意味で青筋を立てる。

(ティナ……スマン、正直忘れてた。そしてゴル兄さんナイス！)

自分に夢中になりすぎて当初の目的を忘れていたクラウド。だが、此処で有力な情報を手に入れる。

「見てはいるけど心当たりはあるわよ。ケフカの所じゃない？ アイツ……ティナの事好きだから……」

「有難う御座ります！ 探してみます。」

見えない相手に礼をし……

「全く、私を変な『タタタに巻き込まないで欲しいわよね……まあ、頑張つてらっしゃい。」

「うしてクラウドはケフカの部屋を探す事にした。

番外編・邪魔するな（前書き）

クラウドが去った後のアルティミシアの部屋で…

～キーワード～

- ・アルティミシアの密かな趣味
- ・魔女

番外編・邪魔するな

部屋を立ち去つていく音を聞いた後…

「ふう、あの金髪やつと行つた。良かった…中入つて来なくて…テレビ見よつ」

「ふう、暗闇の雲…怖かつた！やつと逃げれた。」

何処から入つてきたのだろうか何時の間にかゴルベーザが部屋に居た。

「何故居る？」

「鍵が開いてたから入つちゃつた」

ドカ！バキ！…と殴り扉を開けて追い出した後、バタン！…とドアを閉めて…

ガチャ…と、ついでに鍵も閉めた。

この鍵はアルティミシア特製の時間圧縮が掛かっている。つまり次元が違うのでアルティミシア以外に入れない仕組みになつていてる。

「いやー、開けて！また襲われる…！」

扉をドンドンと叩くゴルベーザ。

「勝手に人の部屋に入つておいて何を言つがー。」

アルティミシアが怒つていると…

「見つけたぞーもつ逃がさん！…」

暗闇の雲の声が遠くから聞こえてきた。

「あああああ、来た。助けて！」

ゴルベーザがアルティニアの部屋の前を去っていた。暗闇の雲も部屋を通り過ぎていて、辺りが静かになつたのを確認して…

「やつと静かになつた… わたし、ドリマ見ようつかな。魔女裁判。」

アルティニアはドリマ鑑賞をし始める。アニメなどの所謂魔女つ娘ではなく深夜ドラマのしかもややドロドロのモノを見るのは年齢のせいだらうか？

密かな楽しみを邪魔されたが、何とかバレずに見れたので良かつたと思つアルティニアだった。

番外編・邪魔するな（後書き）

魔女って言つとサリーとかアツコとかが浮かびますが、敢えてコレで。まあ、年齢もね…魔女つ娘つて年でも…

ド力！

そ、流石…年齢が違うと耳まで年三…

バキ！！

ゴメンナサイ。何でもありません…流石は時間圧縮の魔女様。頼みますから、時間圧縮で次元を超えて攻撃するの止めてくれませんか？

被害拡大（前書き）

ようやく本来の目的を思い出したクラウド。ティナが居るであらうケフカの部屋に辿り着いた彼は…

→キーワード→

- ・初体験
- ・誤解
- ・憐れみ

「よし、着いたぞ。」

クラウドがドアをノックする。

「はつ…はい。」

少しして声の高い男性…ケフカの声が戸惑いがちに聞こえてきた。

「スマセン！コスマスの所のクラウドです。ティナを見かけてませんか？話を聞きたいんで開けて下さい。」

「見かけてませんので他を当たつて下さい！」

凄い早さで否定するケフカに…

「…怪しい。ティナ居るんだろう？開けろよ…」

すると…

「あれ？」の声…クラウド？待つてて、今開けるから。」

ティナだ。ドアを開けようとガチャガチャ鍵を開け始める。

「え？今は…お願いだから開けないで…」

慌てて止めようとケフカに対し冷たく言い放つ。

「は？別に良いじゃない？見られて減るモノでも無いでしょ？」

「気が減るわ！…ダメ、開けないで！…」

ガチャっとドアが開かれた。中にはティナと…

女装をしたケフカが居た。

「あら？…ど～したの？クラウド…」

黙つているクラウドを見て首を傾げるティナ。

（……。不憫な。）

クラウドは本気で同情し憐れみの目で見る。途端にケフカは泣き始めだした。

「シクシク。」

「いや～、暇だつたから来ちやつたんだけどさ…何も無くて。ケフカつてドレス着れるじゃない？それで暇潰しをしてたの。」

如何にも悪気なんて全くありません！…なティナが笑いながら語る。

（暇潰しで此処までやられるとは…）

「クスンクスン。酷いよ…僕、初めてだつたのに…」

「誤解を招く発言は避けてもらえる？」

ケフカの“初めて”という言葉に反応し否定するティナ。泣いてるケフカを指しクラウドに意見を求める。

「ねえ、クラウド…貴方から見てコレど～思う？」「…化粧濃くない？道化師のまま女装したのか？」

クラウドの通りケフカの女装はドレスだけであり顔は道化師のままだった。

「だつて、化けの皮を剥ぐのを嫌がるんだもの。」

「グス。化粧つて言つてくんない?」

ティナの“化けの皮”に反応し化粧と訂正するケフカ。

「ドレスしか着てないからクラウドみたいに完璧じゃないのよ。ああ…」

ティナは完璧に女装を出来ないのを嘆く。そんなケフカを見てクラウドは…

「ピヒロ、お前にへりティナが好きだから…そこまでもやりなくとも…」

それを聞いたティナは驚く。

「ええ！私が好き？ゴメンナサイ、好みじゃありません。」

「誤解を招かないで…そこ、勘違いしない…僕が攫つたのは彼女を此方に戻す為だ！…」

顔を真っ赤にしながら必死に否定するケフカに…

「やっぱ好きなんじゃ…ピヒロ、振られたんだから諦めや。」

今度は違つ意味で同情しだす。

「憐れみの目で見んな！眼球潰すぞ？…だから好きじゃないって！
！くそ～、全部破壊だ！！！」

ケフカはクラウドの反応にキレ始めてしまった。

憐れな道化師（前書き）

ケフカ、マジ切れ！

～キーワード～

- ・ 毒舌
- ・ テイナ：（女装じやなかつたらカツコ良かつたのに…）
- ・ 精神口撃

憐れな道化師

「…で？その格好で何を破壊するの？」

ティナが笑いながら残酷な事を呟く。

「ズキ！」

ケフカは精神に1万のダメージを食らう。

「…ふふ。自分がまず破壊されてるのにね？」

「ズキン！」

尚も続く精神口撃にケフカは10万のダメージを食らう。

（うわあ、酷い…）

クラウドはティナの毒舌を受けてるケフカに同情した。

「鏡見てみなよ？破壊力抜群だから？」

「ティナさん。それ以上は…」

敵でも流石に可哀想と思つたクラウドが止めに入るが…

「良いじゃない？コイツ敵だし…それに私が酷い女つて思えば諦めてくれるわよ。」

「一部同感。…てか気付いてたんだ。自分が酷いって…」

クラウドは此だけ酷い言葉を吐いたのに自覚あるんだなと思つた。

「当たり前でしょ。何処ぞの女神と一緒にしないでよね？」
(プチコスマスが何か言つてる…)

「クラウド、貴方もケフカみたいに破壊しましょうか？」

「どうやら心を読まれたようだ。慌てて…

「いえ。遠慮します…」

首を振つて否定した。すると…

「…ウフフ。」

ケフカが気味の悪い笑い声を発した。

「?
！」

ティナは分かつておらずクラウドはケフカを見てハッとする。

「…ククク。あはははは…」

笑いがドンドン大きくなりティナは混乱した。

「何? 何が起きたの?」

(…ああ、とうとう壊れた。まあ当然か…ティナは気付いてないけど精神ダメージ大だもんな…)

クラウドはそろそろ壊れるだろ? と感付いていた。

「…アハハ。全部破壊してやる！お前も、お前も。我が軍に入れようと思つたがもう良い。お前なんか要らない…！」

涙を流しながら笑い続けるケフカはティナに魔法で攻撃しだした。

「きやあああ。」

「まずはお前からだ！僕を辱めた罪を思い知るが良い…！」
「だから、誤解を招かないでよ…こっち来ないで…！」

魔法を避けようとするティナ…

「ティナ！」

「クラウド、助けて！」

クラウドはティナの元に駆け寄りケフカの攻撃を止める。

「大丈夫だ。ティナ…アンタは俺が守る。俺から離れるな。」

「…はい。」

ちょっとだけ頬を染めるティナ。

「という事で、ティナには指一本触れさせない！かかつて来い。変態。」

「アハハ。私のティナを奪いやがつて！貴様許さんぞ…！」

クラウドvsケフカのバトルが開始された。

二人はラブ・ラブ（前書き）

ケフカ、壊れる。

♪キーワード♪

- ・保護者クラウド
- ・我が儘姫ティナ
- ・35歳児

一人はラフラフ

クラウド vs ケフカのバトルが始まった。

「お前なんか、武器無くても十分だ。さっきの技磨きのお陰で攻撃に慣れたしな。」

後ろにティナを庇いながらもクラウドが挑発する。

「あまり警めるな… 小僧！ 私の恐ろしさを知るが良い！… ほり…！」

挑発に乗ったケフカは早速、魔法で攻撃してきた。

「ティナ、危ないから下がつて。」

「嫌…！」

首を横に振りながら拒否する。

「我が儘言わないの！ ほら攻撃… 魔法来てるから…！」

氷の魔法がゆっくりと此方に近付いてくる。

「だつて… 離れるなつて言つたじゃない。」

文句を言しながら背中にペッタリとくっ付くクラウドの腕をギュッとするティナ。

「言いましたとも。でも、今は攻撃が加わるから下がれつて…」

軽く手を動かし振り払おうとするがビクともしない。

「あんなヘボいのクラウドなら避けれるわよ。」

「俺ならなーお前が避けれないかもしれないから言つてんのーーー。」

「私、か弱いから無理。」

そんなに、か弱く見えないとこつか図太いとクラウドは思つ。

「色々、シシ「ミミたいが置」といふ。…アンタは俺の邪魔をしたいのか？」

クラウドが困ったように聞くとブルブル震えながら泣きそうな声で…

「私…私、邪魔な女だつたの？」

「やつ言つてるんじゃないー…つたく、ほりーーー。」

クラウドはティナをおんぶして攻撃を避ける。

「お姫様抱っこが良い！」

ティナは背中で暴れながら抗議する。

「我が儘を言つんじやありません！いい加減、振り落とすぞ？」「ふ。」

頬を膨らませ怒るティナにクラウドは溜め息を吐く。

「ハア…解つた！後で思つ存分してやるから今は我慢してくれ。良いな？」

「…はい。」

ティナは渋々、了承した。

「さあ、ピエロ！仕切り直しだ！お前なんか足で十分…」

台詞が途切れたのはケフカの様子がおかしいからだ。

「あれ？泣いてる？」

「泣いてないもん！悔しくないもん！…羨ましくないもん！…！」

泣きながら訴えるケフカに…

（悔しいんだ。羨ましいんだ。）

「ちくしょ！ラブランなんか壊してやる～！～」

地団太踏みながら一人を指差し宣言するケフカにクラウドは多少の罪悪感が湧いた。

「……。何かスマン。」

こづして戦いは第2ラウンドへ突入した。

協力プレイ（前書き）

人をおんぶしながら戦う戦士が此処に…

→キーワード→

実際は協力プレイはありません

戦いの最中…

「なあ、ティナ？」

「何〜、クラウド？」

「悪いけど…やつぱ下りて。足だけじゃ無理。」

手はティナをおんぶしているので動かせない。当然、足だけで戦うクラウドは限界だった。

「まあ！私がデブだと言いたいの？」

「違う〜」のままじや共倒れするし…」

ティナ自体は軽い…が、やはり普段は剣で戦つクラウドには手の方が慣れていた。

「でも、ティーダのお父さんは足技で敵を倒してるわよ？スコールだつて足蹴にする技があるし…」

「いや、戦闘スタイルだから…あれ。一緒にするな。」

「じゃあ、バツツみみたいに物真似したら？」

「俺、ものまね士じやね〜よ〜無茶な注文するな〜〜」

だがバツツも敵を足蹴にする技など持ち合わせていない。

「ふ〜しきから全部ダメダメって私の意見も聞いてよ〜〜」「聞いてるから〜無理な事ばかり言つからでしょ〜〜あ〜、もう解つた。」

溜め息を吐き…

「な…何よ?」

「おんぶはしてやる…でも、サポートはしてくれ。それなら出来るよな?」

本当にしてくれるかどうかは分からぬが提案してみる。

「…うん。解った。」

やや迷いつつも渋々了承するティナにクラウドは氣を取り直しケフ力に向かって攻撃の準備をする。

「よ～し、行くぞ。」

反撃開始。

「何度も同じですよ? 謹めて死んではどうですか?」

「つむせえ! ティナ、攻撃を! !

「はいはい。」

ティナは一いつ返事で相槌を打ち攻撃魔法を放つたが…

「…ティナさん、何で俺に攻撃するのかな?」

何故か味方の筈のクラウドに攻撃が当たる。

「あ、ゴメンナサイ…前見えないから間違えちゃった」

絶対ワザとだ。だつて、笑つてゐし…

「お前は～！」

悪氣ゼロのトライナに怒るクラウド。

「仲間割れか、チャンス じゃ あね！」

言い争いをしている最中にケフカが一人に向かつて攻撃をしてきた。

「うわ、やべえ。攻撃が…避けられない。」

「はあ～！」

焦るクラウドをよそにティナがまた魔法を放つた。

「…何で？俺に当たつた？」

今度はキチンとケフカを攻撃している。

「クラウド“姉さん”に攻撃して良いのは私だけよ・・・アンタじゃない。」

どうなティナの攻撃云々より気になる発言がクラウドの心の中で反響している。

（姉さん！姉さんって今言つた？）

見事、ケフカを倒したティナであった。

次回、最終回。

協力プレイ（後書き）

この中でクラウドが一番精神的に大人です。そして不幸かつ苦労人です。

次回いよいよ本編が最終回です。

「」れで最終回（前書き）

ティナがケフ力を倒した。

「」キーワード

- ・抱っこ
- ・本編終了

「これで最終回

ケフカを倒し城を出た二人。

「じゃあ、約束通り。お姫様抱っこ〜」

ティナがピヨンピヨン跳ねながらクラウドに抱っこの催促をする。

「はいはい。」

ティナを抱き上げるが…

「はい抱っこ。帰ろつか?」

数十秒だけし直ぐに地面に下ろす。

「こんな抱っこの内に入んないわよ〜コスモス地域まで抱っこ〜！〜！」

「恥ずかしい事言つな〜！誰かに見られたらどうすんの？もしかすると百合つて思われるかもしれないじゃないか！〜！」

女装中なので遠目から見ると逞しい女性が華奢な女性を抱き上げてるように見えなくもない。

「大丈夫！その時は私がクラウドつてバラすから！〜！」

「どっちにしても茨！…俺、カオスに従おうかな…」

「コスモスといいティナといい秩序組の女性はいつもどりじて性格が

非道いのだろうか。クラウドは本氣で混沌組に鞍替えしようとかと思つた。

「そんな事したら今、此処で始末するわよ 」

魔法を手に持ちながらティナが脅す。

「じょ、〔冗談だつて…嫌だな。」

青筋を浮かべながら先程までの考えを打ち消すが如く首を横に振る。
「良かつた」 クラウド姐さんを始末するなんて私には出来ないもの…

魔法を消し笑顔で言うティナ。

（本氣で始末しようとした癖に…）

心の中でツッコむが口に出したらそれこそ始末されるので黙つておく。話はまた戻り…

「さあ帰ろ? 抱つこ…!」

「…あのな、いい加減に…ど…した?」

見るとティナが座り込み足をさすつている。

「…あ、足が…足が痛い。ああ…このままじゃ私帰れない…。」

（そこまでされたいか? お姫様抱つこ…）

「抱つこ…抱つこ…!」

抱っこホールをし出すティナにクラウドは呆れ……

「解った。ただしカオス地域の出口までな？」

その提案に不満そうなティナだったが渋々了承する。

「むー！解ったわよ。それで良い……！」

クラウドが抱っこしながら帰つてると……

「…助けてくれて有難うね。」

小さな声で礼を言つティナ。

「ああ。当たり前だろ？仲間なんだから。」

「そつか…あと初めに酷い事を言つて、ゴメンね？」

「気になん。俺も悪かったし…」

「カツコイイな。ちえ！」

クラウドに聞こえない位の小さな小さな声で誓める。

「何か言つたか？…うん？寝てる。」

腕の中で安心したよつて寝息を立てる彼女に、やれやれと溜め息を吐き……

「ふう…仕方無い、お姫様を抱っこしてコスモス地域まで帰るか…」

こうして、ティナを奪還したクラウドはコスモス地域まで帰つていた。幸い誰とも会つ事無く帰る事に成功した。

そして、彼らはそれぞれの宿敵と戦い自分達の世界へ帰つたのであつた。

めでたしめでたし。

「」れで最終回（後書き）

これで本編終了です。此処まで読んで下さった方…本当に有難う御座います。

終わり方が変で申し訳ありません…どう書いたら良いか分からなくて…

取り敢えず次回は後書きと二つの名の解説（？）をしたいと思ひます。

あとがき

どーも僕です（有田風）。

此処まで読んで頂き本当に有難う御座います。最後まで拙い文章でスミマセン。

このお話は元々二コ二コ動画を見てて思い付きました。私もこんな風に出来たらな…しかし！残念な事に私は絵が下手なのです。なので絵が駄目なら文章にしてみれば良いじゃ無い…と書いたのがキツカケです。

初めはキャラの台詞と簡単な文章だけでした。で、違うサイトでのまま載せたのですが…不評でした。orz

その数ヶ月後に此方のサイトを知りある程度書き直しつつ投稿してみました。アクセスがあり読んで貰って嬉しいです。お気に入りも登録してもらいましたし…感動です

（爾爾）

本当に有難う御座いました。

次回はキャラ考察について語ります。

キャラ解説

さて、キャラについて語りたいと思います。まずは秩序組から…

・コスマス

秩序組の神。この物語で一番性格が変わった人。そして全ての「元凶」。厳しさを通り越して外道で力オスより混沌。いつたいどうしてこうなったのやら…

・WOL

秩序組のリーダー。コスマスの次に偉いはずが…一番目に性格が破綻した人。人の軸ブレまくりw

・フリオ

よく悲惨な目に遭うのは作者からの愛。バツツに倒され酒に呑まれ…可哀想にw

・ネギ

秩序組で最年少。頭が良いので小憎たらしい台詞が目立ちます。

・セシル

味方に優しく敵に厳しい…敵にしたくないキャラw。1。腹黒。兄が嫌い。まああんな事されれば嫌うよね…

・バツツ

通常運転。酒の話だけ寄り道…まともな彼も見たいかったので。

・ティナ

初めはあんな娘じゃなかつたのに…いつの間にかプチコスマスに。

余談ですが作者はゲームの性格が暗いのであまり好きじゃない。

・クラウド

この物語の主人公。なのに不幸。終始女装の青年。某イベントでは頑張つて最高級のカツラなど集めたのは良い思い出…

・スコール

FF10のアーロンと中の人気が同じなのが皆に老けてるだの実は18歳だの色々な所からツツコまれる可哀想な少年。ゲーム中では20歳児に振り回されますw

・ジタン

第2部の主人公。だがクラウド同様非道い扱い。ゲームでは盗賊で集団行動に馴れてるせいが保護者っぽい。

・ティーダ

KY?出番少なくてゴメン。短編でもあんな事言つてゴメン。書く事あまり無くてゴメン。

・シャントット

年と背を気にしてるので絶対言わない事。ゲーム中ガブプラス同様にもつとストーリーが欲しかったな…

続いて混沌組です。

・カオス

混沌組の神。過去編以外に出番が全く無いが少なくともコスモスより良い人。

・ガーランド

混沌組のリーダー。W.O.Lと戦いたくて戦いたくて仕様が無い。

- ・皇帝

気が付いたらクラウドのアコイにされ挙げ句裏切られる。

- ・暗闇の雲

痴女。だが物語で言つてゐ事がマトモなのは彼女だけだったりする。

- ・ゴルベーザ

紳士といつての変態。ゲーム中のカツコ良さなど微塵も無い。

- ・エクスデス

先生。作者もゲーム中に技磨きなどお世話になつた。しかし本気を出せば強い。

- ・ケフ力

精神破綻者その1。一見ちゃらけてるが言つてゐ事は的を獲ている。

- ・セフイロス

精神破綻者その2。お前どんだけクラウドと言つんだつて位クラウドが好き。遂にはストーカーにまで成り下がつた人。

- ・アルティミシア

性格が何となく良さげに…年は気にしてるので話題は禁句。

- ・クジヤ

変態露出狂。ジタンに執着するがセフイロスほどでは無い。身嗜みさえ直せば良くなると思つ。

- ・ジョンクト

混沌組の良心。ティーダとは親子だが仲が悪い。息子を大切に思つてゐるが不器用な為、上手くいかない…ちょいワル親父。

・ガブ拉斯

負け犬というか自分を卑下する人。シャントットより出番が少ない…

・シド

ナレーター。各シリーズには自分と同じ名前の人が居るが別人。ア
ンケート編では司会者。

…感じですかね？長々と失礼しました。

アンケート カオス編（前書き）

ここから短編に入ります。

- ・キーワード
- ・腕
- ・カオス

アンケート～カオス編～

「皆さん、お久しぶりです……え?誰かつて?私は…」「おい、シド…早くするが良い。私は次回作で忙しいのだから…」

カオスが急かす。

「…。そうだな。では始めようか… DISSIDIA ファンの皆様、お待たせいたしました!本日は混沌組の神・カオスさんに来て頂きました。」

パチパチと手を叩き…

「我が名はカオス。混沌を司る神だ…宜しく。」

「さて、前回はコスモスさんのせいで滅茶苦茶になりましたが…今回は大丈夫ですよね?」

「あの女神と一緒にするな…我はアレよりかはマシだ。」

コスモスと比べれたカオスはやや腹を立てる。

「そうですね…じゃあ早速カオスさんの採用理由です!」

前回同様にホワイトボードが表れ…結果がビッシリ書かれていた

ガーランド・バトル馬鹿

皇帝・世界征服は男のロマンを感じた

暗闇の雲・セクシーだしもしかすると色番でだませるかも(敵を)

ゴルベーザ・兄弟喧嘩

エクステス・やられ役兼指南役

ケフカ：ムードメーカー

いか：非常食

アルティミシア：魔女つ娘つてファンタジーに必要だよね？

クジヤ：詩人かと思って間違つて採用しちゃつた

ジエクト：親子喧嘩

犬：ペット

「…」

シドはボードを見て絶句した。

「どうだ？ちゃんとした理由だろ？」

「何処が！何か2人だけあだ名だし…それにセフィロス食えないから…！」

「え？あれはイカだろ？」

「確かにフのラストとか二二二二動画でBUMP OF CHICKENのいかの歌のMADあつたけど…違うから…」

一気に喋りハアハアと息切れするシド…

「ハア…では次にカオスから見た秩序組の感想です。」

別のボードが出てきた

WOL：我がライバル

フリオニール：ターバン巻いたお洒落さん

オニオンナイト：小さき者

セシル：闇使うのになんでそつち側にいんの？

バツツ：我も真似してくれないか？

ティナ：どうして離れちゃったの？

クラウド・いかに負けるな

スコール・もつと喋れ

ジタン・兄より賢いね

ティーダ・父親奪つて『メン

シャントット・性格破綻者

「何か…ティナに対し未練タラタラじゃないか？」

「我が軍のヒロインかつエース だつたからな… 本当何で離れたのやう…」

（お前がセクハラするからだろ。）

シドはティナの話題から変えてバツツの理由に注目してみた。

「あの…言ひにくいけど、体型的にバツツは物真似出来ないと思つぞ?」

「分かつておる。腕が足りないし…しかし、スコールやジタンに頼めば出来るだろ?」

「いや、無…」

“無理”と言おうとしたが、途中遮られて…

「UHU・UHU て ら あ い ね。」

「EXILE! お前の物真似じゃないのかよーー!」

またしてもシシ ロリに息を切らすシド。

「ふう〜。じゃあいよいよ混沌組から見たカオスの方を見て見るか。

」

げんなりしながらも続ける。前回コスモスの時に身内の理由を先に

見せた為に大暴れして時間を割いたので今回は変えてみた。

「うむ。楽しみだ！」

上司として自信満々のカオスの前にボード登場

ガーランド：貴方は私

皇帝：貴様を滅ぼしてこの世界を征服してやろう

暗闇の雲：マントと翼が被る

ゴルベーザ：体格はどっちが上かな？

エクスデス：私を無に還せ

ケフカ：破壊万歳

セフィロス：どくでも良い

アルティミシア：何で皇帝の秘書っぽいポジションなんだろう？

クジヤ：僕は自分とジタンだけさ

ジェクト：何故俺こっちに来たんだろ…

ジャッジ：ぐだらん戦いに巻き込むな

「秩序組も回答凄かつたですが、負けてませんね…」

「流石、我が部下たち。」

「そ… そうだな。まさに混沌だな。」

「ははは。巧いなシド！」

カオスは馴熟落に大爆笑した。

（もう…嫌。この神共…）

シドはウンザリした。

「いよいよ最後です。秩序組から見たカオス。」

最後だとこつのに投げやりになるシド。ボード登場

WOL・コスモス（妻）を奪われた

フリオニール・何か皇帝に禪が似てる

オニオンナイト・手がいっぱいあつて便利そつ

セシル・兄さんと体格被る

バツツ・腕がいっぱいあつて不便そつ

ティナ・昔はお世話になりました

クラウド・興味無いね

スコール・どうやつたらあんなに育つのやら…

ジタン・隣に並びたくない

ティーダ・親父を奪われた

シャン・カスオ

「感想は？」

シドが投げやりな質問を出す。

「腕はいっぱいあると便利だぞ。しかし…」

「？」

「ティナちゃん、昔つて…」

泣き始めるカオスを無視して…

「（ああ、ウザイ。）では、カオスさんが泣いてしまったようなので今回はこの辺で…次回は新キャラ参戦についてレポートしたいと思つ。」

「うわ～ん。」

シドは泣いてるカオスをその場に残し去つていた。

アンケート～カオス編～（後書き）

話に出てきた二コ二コ動画ですが、大爆笑しました。その内、オススメ動画を紹介したいです。

もしも「コスマスが…（前書き）

プレイヤーキャラだったら？

→キーワード

- ・鬼畜なコスマス
- だが事実
- 実際こんなバトルはゲーム中にありません

もしも「コスモスが…

「コスモスｖｓセフィロスのバトルスタート。」

「行くぞ…」

先に仕掛けたのはセフィロスだった。コスモスに向かい攻撃をするが余裕で避ける。

「おのれ…女神の癖にチョコマカと…」
「何ですって？」

セフィロスの言葉にカチンと来たコスモスは刀を両手で抑え…攻撃を止める。

「なつ…馬鹿な！動かないだと…！」

「ふん！私は神よ。神に刃向かつた事を後悔させてあげるわ。有難く受け取りなさい…！」

まずは精神から攻撃をし始める。

「まあ、ジエノバが母親と思つてる時点で頭おかしいわよね？あ、ゴメンなさい。悪気は無いのよ。ただ、あんな素敵なお母さん（ルクレツィア）居るのにそつ思つと貴方が哀れだなつて思つて…」

と笑いながら叫ぶ「コスモス。

「あ、貴様！」

怒るセフィロスなどお構いなしに続く精神攻撃。

「でも仕方無いわよね？父親（宝条）がアレじゃあ頭も悪くなるわよね。ていうか昔は母親似だったのに…今ではすっかり駄目人間な父親似ね？」

「…。」

精神攻撃が効いたのか黙り込むセフィロスに更なる追い討ちを掛け る。

「オホホホ…遠慮無く喰らいなさい。」

遠距離で魔法を唱えて近距離だけでロッドでタコ殴り。

EXは神の慈愛で愛といつ名だけの暴力でセフィロスを討ちのめす。

「畜生…」

見事セフィロスを倒したコスモスは…

「女神の私に勝てると思つてゐるの？甚だしつたらありやしないわ！忠告するわ…もう一度と私（神）に逆らわない事ね。オホホホ！」

「！」

腰に手を当てシャントットのように高笑いをしながら決め台詞を言うコスモスだった。

じつしてバトルはコスモスの勝利で幕を閉じた。

もしもコスマスが…（後書き）

誰もこの女神には逆らえませんでした…勿論、カオスも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4609m/>

クラウドの受難

2011年3月8日15時44分発行